ライオン誌（毎月20日発行）第55巻第9号 2013年2月20日発行 昭和33年12月19日付第3種郵便物認可

IN JAPAN Official Publication of Lions Clubs International

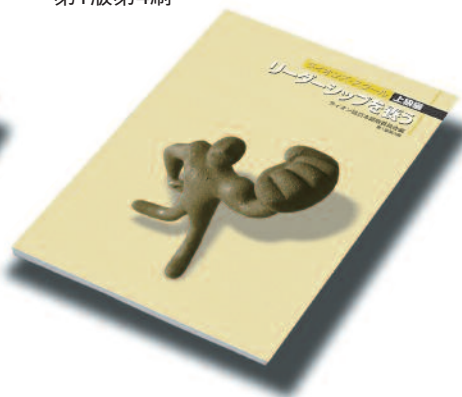
WWW.THELION-MAG.JP MARCH 2013 3

今月のTHEME

追跡・東日本大震災Ⅲ

ライオン誌日本語版出版物

ライオンズスクール・シリーズ

初級編・ライオンズクラブ入門
第3版第3刷

入会したての新会員を対象に、これだけは知っておきたいライオンズクラブの基礎知識をまとめた。併せて「ライオンズ用語集」も収録。
A4判 64ページ 1部400円・送料実費

中級編・クラブ運営の基礎知識
第3版第2刷

クラブ運営の基本を分かりやすく解説。知識を確認したり、セミナーや研修会などでグループ・ディスカッションに利用出来るワークシート付。
A4判 64ページ 1部400円・送料実費

上級編・リーダーシップを養う
第1版第4刷

国際協会の総合的リーダシップ育成プログラムを基に編集。地区役員研修会などの副読本に、またクラブ会長や地区役員の指導力育成に最適。
A4判 64ページ 1部400円・送料実費

※ライオンズスクール・シリーズはいずれも50部以上ご注文の場合、送料無料（ただし、急ぎの場合は実費請求）。
●大口注文割引＝100～499部350円／500部以上300円

※お申し込みは下記注文書をお使いの上、郵送またはファクスでお願いします。
※電子メールの場合は、地区名・クラブ名・お名前・ご住所・お電話番号を明記し、office@thelion.jp宛てにご注文ください。
※ライオン誌ウェブマガジンからオンラインでのご注文も承っています。下記のライオンズ文庫注文フォームからどうぞ。
https://www.thelion-mag.jp/modules/inquirysp/index.php?op=2
※請求書・振込用紙は、品物に同封します。（大口注文の場合は別便で送付）

〒104-0045 東京都中央区築地2-2-1 築地細田ビル7階 ライオン誌日本語版事務所（FAX：03-3546-2630）

キリトリ線

ライオン誌日本語版出版物　注文書

●ライオンズクラブ入門 …………　部
●クラブ運営の基礎知識 …………　部
●リーダーシップを養う …………　部
●創刊55周年記念特別セット…………　セット
（『ウィ・サーブ』『ライオニズムよ永遠に』『ライオン誌日本語版創刊号復刻版』の３冊入り）

地区名 33 -	クラブ名	お名前（クラブで注文の場合は不要）
ご住所 〒 -		お電話番号

LION MAGAZINE IN JAPAN
March 2013, Vol.55 No.9

We Serve CONTENTS

2013年3月号
●表紙シリーズ
日本の風景 36
三重県亀山市
関宿
写真／鈴木秀晃

本誌は環境に配慮したFSC®認証紙を使用しています。

A Message From Our President

Wayne A. Madden
Lions Clubs
International President

国際大会は最高の体験

1950年代の『ライオン』誌をひも解けば、国際大会に関する記事には、常に「過去最高」の文字が躍っています。もちろん、大会が毎年少しずつ改善していた可能性もあり、例年の賛辞はもっともだったかもしれません。しかし、「過去最高」という感想は1960年代になっても変わらず、その後もずっと同じです。これは参加者の誇張だったわけでも、『ライオン』誌が持ち上げていたわけでもないでしょう。むしろ、彼らがその体験に圧倒され、絶賛せずにはいられなかったのではないでしょうか。

すばらしいホスト・シティ、ドイツ・ハンブルクで開催される今年の第96回国際大会も、間違いなく「過去最高」とたたえられることになるでしょう。この美しい古都には国際色と美食の香りが漂い、見事な「旧世界」の街並みが続いています。近代的なアメリカの町とは全く異なり、ヨーロッパの粋を集めたようなその姿には、何世紀にもわたって培われてきた魅力があります。

この大会を成功に導くため、ドイツのライオンズは懸命に取り組んできました。彼らの敬服すべき効率的な働きと温かい歓迎によって、参加者は必ずや大会を楽しみ、最大限に生かすことが出来るでしょう。

国際大会は友情、喜び、豊かさに満ちています。 参加者は120カ国を超える国々のライオンズと親交を深め、昼食を共にしたり、気軽に冗談を交わしたりするはずです。また、各国が参加する陽気なインターナショナル・パレードでハンブルクの街を練り歩き、有意義なセミナーに出席し、国際協会の未来を決める投票にも参加出来ます。更に総会では、華やかな催しやインターナショナル・ショーを楽しみ、名高いスピーカーの感動的な言葉に聴き入ることになるでしょう。皆さんがライオンであることを気に入っているなら、大会を心から楽しめることは請け合いです。

国際大会は、ライオンズとしての奉仕とアイデンティティーを称揚する絶好の機会です。世界中から集まった仲間は共に1週間を過ごす中で、ライオンズの一員であることが何を意味するか、その奉仕によって何が成し遂げられるかを深く理解するようになります。また、他のクラブや地区の事業について学び、国際協会の指導者や本部スタッフと個人的なつながりも築けるでしょう。ハンブルクで温かくもてなされて帰路に就く頃、一人ひとりの胸には奉仕への新たな熱意が燃えているはずです。

妻のリンダともども、国際大会で皆さんにお会いすることを楽しみにしています。奉仕の世界では、世界に尽くしている気高い人々が共に忘れられない1週間を過ごします。それは私たちの偉大なる組織にエネルギーとビジョンを与え、将来に向けて前進させていくことになるでしょう。

Wayne A. Madden

2012-13年度国際会長
ウェイン・A・マデン

THEME

追跡・東日本大震災Ⅲ

東日本大震災の追跡取材第3弾。
被災クラブと会員の復興の足取りを追うルポと、
ライオンズクラブの被災地支援活動を考える座談会。

東日本大震災の犠牲者を追悼し、復興を祈願するモニュメント「3・11 大槌希望の灯り」。岩手県・大槌ライオンズクラブと福井県・敦賀みなとライオンズクラブが合同で、大槌町の中心部や、「ひょっこりひょうたん島」のモデルとされる、蓬莱島を望む高台に建立した

東日本大震災被災クラブ追跡取材 第3弾

岩手県・陸前高田ライオンズクラブ、宮城県・南三陸志津川ライオンズクラブ、福島県・飯舘ライオンズクラブ

長く困難な復興の日々 支える古里への思い

津波により11人もの仲間を失った陸前高田ライオンズクラブ（菅野征一郎会長／70人）、会員のほぼ全員が自宅と事業所の両方を流された南三陸志津川ライオンズクラブ（阿部雄一会長／36人）、そして原発事故で全村避難となり、会員全員が避難生活を余儀なくされている飯舘ライオンズクラブ（赤石澤栄会長／30人）。東日本大震災から2年目を迎えるのを前に、深刻な被害を受けた被災地の3クラブを訪ね、復興の途上にある会員とクラブの今を取材した。

取材／河村智子

岩手県・陸前高田ライオンズクラブ

次世代に町を受け継ぐため

2012年9月、陸前高田市の希望の象徴となった「奇跡の一本松」が、保存のため伐採された。11月には多数の犠牲者が出た市民体育館が解体され、市役所など残された公共建築物も、3月までに全て取り壊される予定だ。

復興計画では、高さ12・5メートルの堤防を設けて海沿いにメモリアル公園を作り、市街地はこれまでより山側に移して5～8メートルのかさ上げをする。高台移転先の造成も始まり、先行する2カ所の造成で出た土で、かさ上げ分が賄われる見込みだという。

がれきは1次集積場での分別作業が3月までに終了し、2次集積所へと移される。ここで更に細かく仕分けされた後、資源として太平洋セメント大船渡工場に運ばれ、セメント原料として使われる。震災後、いち早く仕事を再開し、がれき撤去や道路の復旧工事に携わってきたライオン金野秀の建設会社は、他の2社との企業共同体で、2次集積所での作業に当たることになっている。

陸前高田の市街地は、大きな建物だけ残して跡形もなくなった

「早く片付けて、どんどん進んでいかないと、復興が遠のいていく」

金野（ライオン）のはやる気持ちとは裏腹に、市民の中には震災の記憶として被災建物の保存を望む声もある。高田松原を一望する絶好の立地にあったキャピタルホテルは、陸前高田ライオンズ（クラブ）の例会場だった。移転再建が決まり、昨年11月に解体に着手したものの、残してほしいという市民の声に工事が止まった。1日も早い復興を望む気持ちは同じでも、胸に渦巻く思いはさまざまだ。

●

菅野（ライオン）征一郎は毎月11日、妻と共に、息子が勤務していた陸前高田郵便局の前に立つ。一人息子、裕行さんの月命日。好きだったコカ・コーラや花を供え手を合わせる。父親に似たのか、裕行さんはお酒がまるで飲めなかった。外壁だけが残った郵便局の解体が始まり、複雑な思いが込み上げる。津波が来た時はどんな思いだったのだろう。もう少し早く逃げてくれれば良かったのに。2年近くが経っても、何かの拍子に思い出して涙ぐんでしまう。「いつまでもくよくよしないで」と励ます人もいるが、忘れられないし、決して忘

仮設事務所で開かれた11月第1例会。クラブの事務局を担当する不動産業のライオン村上きみ子と、ライオン金野秀の建設会社がグループ補助金を受けて仮設事務所を立ち上げることが決まり、3月にはその敷地内にプレハブごと移転する

れてはならない。それが息子へのせめてもの思いやりだと感じている。

今年度クラブ会長のライオン菅野は、震災発生時には幹事を務めていた。11人もの会員を失い、会員の多くが事業所や住まいを流され、ライオンズどころではないという状況の中、クラブの活動は必要最低限にして続けていく方針を決めた。それでも、全国から続々と支援が寄せられると、地元クラブとして相談に応じたり、調整を担当したりと、精いっぱい努めてきた。だが1年余りが過ぎ復興が本格化してくると、それにも無理が生じてきた。今年度初め、震災直後に立てた方針通り、各メンバーが自らの事業に全力を注ごうと話し合った。メンバーそれぞれが事業を再興し雇用を守ることが、何よりも町の復興につながるからだ。他クラブの支援の申し出には、人的な協力はあまり出来ないこと、地元としては金銭による支援が望ましいことを、率直に伝えることにした。

既に物資支援が必要とされる段階ではなくなり、学校などの教育機関にも十分な支援が集まっている。地元の特産品を購入することで支援したい、という問い合わせも寄せられるが、陸前高田の場合は水産業の復興が思うように進んでおらず、紹介出来る商品がほとんどない。もう少し待ってほしいと思いながら、3年、5年と時が経って、いざ助けてほしいと思った時には忘れられているのではないかと、危機感も募る。

●

震災から1カ月余りで「がんばろう陸前高田給油所」を仮設オープンさせたライオン菅原悟は、昨年11月に本設工事の造成に入った。大船渡と陸前高田の同業者と共に国のグループ補助金を受け、来年3月には完成の予定だ。従業員を路頭に迷わせるようなことはしたくないと、ひたすらに歩を進めてきた。

ライオン熊谷又吉（2011・12年度クラブ会長）の水道工事会社には、東京で修行した息子が1年前に戻ってきた。期待以上の働きぶりで、口に出してはいないが、大したものだと思っている。昨年は年末にかけて目の回るような忙しさだった。少しずつ、自力で高台に住宅を建てて仮設住宅を出る人も増え、正月前に引っ越しを済ませようと工事の依頼が相次いだからだ。しかし多くの人は移転先が決まらず宙ぶらりんなまま、仮設住宅で2度目の正月を迎えた。ライオン熊谷の会社の従業員も、住む場所

が決まった者はいない。この先、自分がどこに住むのか、それが決まるだけで、生きる力、働く力が沸いてくるはずなのに。一刻も早くと祈りながら、現場を駆け回る日々だ。

11月、陸前高田ライオンズクラブは市内9小学校が参加する「未来に向けた意見発表会」を開いた。市教育委員会と共催で長年続けてきた「少年の主張大会」を昨年度は中止。今年度は、町の将来を背負う子どもたちに将来の夢や町づくりについて考え、発表してもらおうと、名称を変えた。米崎小学校代表のグループは、自分たちの町の模型を作って発表に臨み、これからの町づくりについて堂々と意見を述べた。

そんな子どもたちに古里を受け継いでいくためにも、復興に向け奮闘が続く。

宮城県・南三陸志津川ライオンズクラブ

町の発信力が復興への鍵になる

「あそこまで盛大な会になるとは、夢にも思っていなかった」

昨年4月21日、9カ月遅れで開かれた結成50周年例会を、ライオン小坂克己（2011・12年度クラブ会長）はそう振り返る。全国から支援に訪れてくれたクラブに、復興状況の報告のつもりで案内を出すと、遠く沖縄からの出席者を含む280人が集まった。チリ津波地震後のライオンズによる支援活動がきっかけで生まれたクラブは、奇しくも半世紀の節目に再び津波を経験し、ライオンズの絆の強さを胸に刻むことになった。

南三陸志津川ライオンズクラブには、受け継がれてきた独自の役員選出システムがある。幹事職を終えた会員が第3副会長に就き、第2、第1副会長を経て会長に就任。この時、幹事時代に仕えた会長が会計に就任する。世話になった幹事へのいわばお礼奉公であり、後輩を側で見守り支える意味もある。

「手前味噌だが、他のクラブの話を聞くと、やっぱりうちのクラブはすごいなと思う。基盤がしっかりしているし、メンバー同士の交流、チームワークも良い」

今年度会長ライオン阿部雄一は、「自分の物差し」と呼ぶ会計のライオン高橋渡を頼りにしながら、重責を担っている。

洋菓子店・雄新堂を営むライオン阿部が、仮設の店舗で営業を再開させてから1年。震災の経験をきっかけにパン作りも始めたため、朝4時前に工場に入ってパンを焼き、その後は洋菓子作りと、寝る暇もない忙しさだ。

「自分の作るケーキで町の人を笑顔にしたい」と言うライオン阿部雄一の「雄新堂」のケースにはおいしそうなケーキがずらり

会長就任から半年。陸前高田ライオンズクラブと同じような悩みを感じてもいる。他クラブからの支援への対応が負担になり、仕事に影響を及ぼしてしまう。他のメンバーの協力でどうにか義理は果たせているが、感謝の気持ちと、十分に責任を果たせない現状の狭間で葛藤がある。

仮設店舗は、昨年2月にオープンした仮設の「さんさん商店街」の中にある。商店街の客は8割が町外から訪れるが、雄新堂には地元客が多い。レシピが流され、以前と全く同じというわけにはいかないが、町の人たちにとっては懐かしいお菓子だ。

あの日、一緒に津波から逃げた若い従業員は、一人は出産のため、もう一人は震災の後に心を病んで、退職した。店の再開に当たって新たに二人の従業員を採用したが、どちらも自分と同じ50代。商店街の他の店でも、求人を出しても若い応募者がないという。より条件の良い仕事を求めて、町外に職を求める人は少なくない。震災前は1万8千人の町民がいたが、今は1万2500人ほど。住所は残したままで町外に住む人も多く、実際にはもっと減っていると考えられる。

●

志津川小学校のPTA会長を務めるライオン佐藤信一も、若い世代の流失を実感している。志津川小学校には450人の児童がいたが、震災の後は200人に減った。夏休みが終わる前に仮設住宅が完成したものの、戻ってきた子どもは50人もいない。被災した町の企業が高い賃金を払えるはずもなく、転職が容易な若い親たちは家族と共に出て行った。いずれ必ず戻ると言っていた人も、仕事が軌道に乗り、子どもたちに新しい友達が出来ると、心変わりしていく。

ライオン佐藤自身は、町を離れるつもりは全くない。商売道具のカメラバッグ一つを持って写真館から避難し、「復興を遂げるその日まで町の姿を記録する」と、心に決めた。それから1年半が過ぎて、ファインダー越しに見つめる町の人たちに、不安の色が濃くなるのを感じている。1年目は、全てを失い落ち込みはしても、負けずにがんばるぞという気概があった。たくさんの支援を受けて、何かやれるんじゃないかという高揚感も感じられた。それから時間が経ち、厳しい現実が目の前に迫ってきた。浸水地域にある所有地を売却するか、換地するか、高台の移転先をどこにするか、決断の時が近付いている。その先、高台に家を建てて生活が落ち着くまで何年掛かるかもはっきりしない。この状況がいつまで続くか、長いトンネルに入ったような感覚を誰もが感じている。

「さんさん商店街」で写真館の営業を再開させたライオン佐藤も、移転先に頭を悩ませている。仮設商店街の期限は5年。町の計画では高台の3カ所に住宅地が造成され、かつて街があった平地は商業地域になって、居住は出来なくなる。以前は町の商店のほとんどが住居兼店舗で、家事や家族の世話をしながら夫婦で店を切り盛りするのが当たり前だった。商業地域に店を構えるか、高台に住居兼店舗を作るのか。新しい町の姿が見えてこない中での困難な選択だ。

もう一つ、ライオン佐藤が危惧しているのは、町の発信力が弱まっていること。震災後、南三陸の名は全国で知らぬ人がないほどになった。しかし、すぐ記憶の片隅に追いやられてしまうかもしれない。人々の関心が低くなれば、それだけ復興の速度が落ちていく。震災後の町の姿を収めた写真集『南三陸から』を出版してから、ライオン佐藤は写真展や講演に各地を訪れている。昨年8月はオリンピックに

沸くロンドンへ。世界に感謝の気持ちを伝えようと企画されたイベント「ARIGATO in LONDON」に写真が展示され、訪れた人に思いを伝えた。これからも、震災の記憶と南三陸の今を発信する語り部として、出来る限り活動していくつもりだ。

●

昨年12月半ば、ライオン三浦洋昭の水産加工会社マルセンの工場は、正月向け商品の生産に追われていた。夏には組合11社で作った冷凍設備が完成し、生産態勢は整ってきている。しかしまだ原料が足りない状況だ。カキやホタテなどの養殖物は、品薄で値が高い。養殖カキは、1年前の時点で生育は順調と思われたが、期待は外れた。生産者によれば、温暖化の影響で通常より早く抱卵し、身が痩せてしまったという。再開からまだ1年余り。これからが正念場だ。

ライオン三浦が事務局長を務める「さんさん商店街」は、予想以上に順調なスタートを切った。旅行会社に働き掛けて企画したツアーや、ボランティアでつながりの出来た人たちが、支援のためにと買い物に来てくれた。オープン当初は、この忙しさで5年間も体が続くかと皆が心配したほどだ。しかし、年末になって客足が減り、じわりと不安が込み上げてきた。深刻な状況になる前に、先手を打つ作戦も進めている。

4月には商店街の隣に、観光協会の情報発信基地と、70坪のテントを建てたイベント・スペースが出来る。チリ津波地震のつながりで交流してきたチリからは、モアイ像が届く予定だ。JR気仙沼線の振替バスBRTの停留所が商店街前に移転して、アクセスも良くなった。旅行会社やJRに協力してもらい、地元の魅力をアピールしていくつもりだ。そうやって外から人を呼び込むだけでなく、商店街を町の元気の源にしていく計画も練る。例えば、仮設住宅対抗歌合戦。町民の憩いの場として活用し、仮設住宅間の連携を高めたり、お年寄りのメンタル・サポートなどに役立てていきたいと考えている。人を元気にすることが、町の魅力を高めることにつながっていく。

ライオン佐藤信一の「佐良スタジオ」跡に立つ「きりこ」を模した看板。震災前は商店街だった通りに、店主の思いを伝える言葉が並ぶ。「きりこ」は和紙を切り抜いて作る、この地方伝統の神棚飾り

志津川漁港に揚がった秋サケ。震災前は一匹狼だった漁師が、会社組織を立ち上げたことで、生産・流通の態勢に変化が起きている。基幹産業である水産業の再生が、町の復興を支える

福島県・飯舘ライオンズクラブ

固い決意で待ちわびる帰村の日

福島市南部の松川工業団地内にある飯舘村松川仮設住宅。その入り口に真っ赤なのれんを下げた中華「琥珀」の仮設店舗が出来たのは、震災から8カ月後のことだ。店の主人、今年度のクラブ会長ライオン赤石澤栄は、避難先の借り上げ住宅から、車で片道40分の道のりを通っている。

消防団の副分団長だったライオン赤石澤は、地震発生直後から避難するまで、役場に詰めて飲料水や支援物資の配布に当たった。5月18日、妻と82歳になる母、愛犬と共に福島市飯坂の借り上げ住宅に避難。初めの頃は、先行きの不安とストレスで酒の量ばかり増えた。しかし「いいたて全村

見回り隊」に加わり、1日おきに夫婦で村のパトロールに出掛けるようになって、力が湧いた。その後8月半ばに仮設店舗の準備に取り掛かり、開店にこぎ着けた。

厨房設備や道具が変わり、店のメニューは半分ほどになったが、看板の「琥珀ラーメン」は健在。カリっと焼いた豚ロースと野菜がたっぷり乗ったボリューム満点のラーメンは、開店当初からあるオリジナルだ。34年前、横浜や横須賀で修行を積んだ赤石澤は25歳で飯舘へ戻り、運転手の仕事で貯めた資金で店を開いた。田んぼの真ん中に自力で建てた店は、それから2度建て替えをし、村の人たちに愛されてきた。再開した店には、仮設住宅の入居者ばかりでなく、馴染みの客がわざわざ足を運んでくれる。

「琥珀」の店名はかつて勤めた横須賀の店の名前をもらった。「中国では格が高い石だというし、何より『絶対に負けない』という感じの強そうな字が気に入った」と赤石澤栄

人口6千人、山間にある飯舘村では「までい」を合言葉に村作りを進めてきた。「までい」とは、「丁寧に」「心を込めて」といった意味の方言。村人は自然の恵み豊かな農村ならではの、穏やかな暮らしを営んでいた。

菅野哲は役場を退いた後、2・5ヘクタールの畑で野菜を育て、土に根差した日々に生きがいを感じていた。

周囲の豊富な木材を生かしてエコな暮らしを実践したいと、志賀清一は板金の技術を生かし、ガスタンクを再利用した薪ストーブを製作。手作りストーブに薪をくべながら、充実した日々を思い描いていた矢先、震災が起こった。

今年度幹事の渡邊俊郎は、妻と息子夫婦、孫3人と一つ屋根の下、笑い声の絶えないにぎやかな日常を送っていた。村からの避難は子どもを持つ家庭を優先して始まり、息子夫婦はいち早く福島市内へ。建設会社を営む渡邊は少しでも会社に近い場所が良いと、妻と共に川俣町へ避難。息子一家とはたまに顔を合わせるだけになった。

●

震災直後、飯舘村は津波の被害が大きかった沿岸部から、約4千人の避難者を受け入れた。その後、原発事故により、村内が高濃度の放射能に汚染されていることが判明。4月22日に計画的避難区域の指定がなされ、全村避難が決まった。クラブはとりあえず全員と連絡が取り合えるようにし、7月からの新年度も前年度クラブ3役が引き続き務めることを決めた。飯舘ライオンズクラブは固定の事務局を持たず、事務全般をクラブ幹事が担当する。メンバーの避難先は、当時の幹事三瓶政美が電話で連絡を取り合い、確認していった。避難先は半数余りが村役場のある福島、他は県内各地に散らばり、中には東京都内へ避難したメンバーもいる。その間にも、クラブには義援金が届き、国際協会による会費免除の決定が伝えられた。そうした支援を受け、活動は出来なくとも完全に休会するのではなく、可能な限りは臨時例会と称してメンバーが集う機会を持つことにした。震災後、初めてゴングを鳴らしたのは、昨年1月に開いた新年例会。例年通り家族ぐるみで温泉に1泊し、この時ばかりは避難生活の苦労を忘れて盛り上がった。

「和気あいあいとして言いたいことが言い合える。結束力のある良いク

ラブだと胸を張って言える」と、ライオン赤石澤は言う。家族ぐるみの付き合いで、国際大会やOSEALフォーラムには毎年のようにクラブでツアーを組んで参加する、とにかく仲の良いクラブだ。そんなクラブを守りたいと、ライオン赤石澤は会長に就任して以来、地区の会合に出来る限り出席するよう努めている。

飯舘村から避難し、営業を再開させた手打ちうどんの店「ゑびす庵」は、飯舘村の村民が集う憩いの場になっている。元旅館だった店舗には集会スペースがあり、宿泊も可能。そこで例会場として使わせてもらうことになり、これを機に昨年7月、店主のライオン高橋義治が入会する運びとなった

●

昨年11月16日、福島市荒井の「ゑびす庵」で、飯舘ライオンズクラブの例会が開かれた。今年度に入って3回目の例会。南相馬市から2時間掛けて駆け付けたメンバーもいる。久々の開会ゴングの後、9月に闘病の末亡くなったチャーター・メンバーのライオン遠藤利治に黙祷を捧げた。3・11以降、初めての退会者だ。震災前、ライオン遠藤が営む食堂はクラブの例会場で、毎年12月はボタン鍋例会というのが恒例になっていた。閉会後、楽しく酒を酌み交わす懇親会で、自然と口に上るのは放射能の数値や遅々として進まない除染の話だ。「みんな放射能の専門家よりも詳しくなっちゃったな」。笑いまじりの冗談に、やるせない苦悩がにじむ。

村は昨年7月から、空間放射線量に応じて「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」「帰宅困難区域」の3区域に再編され、帰宅困難区域を除いた地区では、一部事業所で営業が始まった。計画では2014年3月までに除染を完了させ、村内20の地区のうち16地区の避難指示を解除することを目指している。

とにかく前を向いて進むしかないと、店に来る常連客を励ますライオン赤石澤も、胸の内は複雑だ。村に戻って以前のような暮らしを送れるとは到底思えない。家族がバラバラになり、戻るのは高齢者ばかりになるのではないか。住み慣れた家に帰っても、庭で野菜を育て、春には山菜、秋にはキノコを採っていた暮らしは再び出来そうにない。それならむしろ、仮設暮らしの方がましではないか。そんな思いもよぎる。

それでもなお、飯舘に戻って店を再開させ、必ず村を復興させると、ライオン赤石澤は心に誓っている。古里を深く愛する思いが、復興へ向かう原動力だ。

座談会

被災地支援を続ける3クラブの軌跡と展望

東日本大震災から2年。メディアで取り上げられる機会は減ってきたが、
被災地には震災の爪痕が依然として深く残り、復興もなかなか進まない。
そんな中、震災直後から支援活動を継続して行っている3クラブに話を聞き、
この機会に改めて、ライオンズクラブとしての被災地支援を考える。

●出席者●
木村知紀（青森県・弘前東奥ライオンズクラブ）
吉田国代志（千葉ネオ ライオンズクラブ）
苗加康孝（富山県・高岡志貴野ライオンズクラブ）

同行出来ないメンバーが支え、クラブ一丸で支援に取り組む

――まず、それぞれの被災地支援のきっかけを教えて頂けますか。

木村　震災では青森県も被災し、正直ライオンズどころではありませんでした。でも、徐々に状況が落ち着き情報も入って来るようになり、何か出来ないか考えるようになったんです。それで、其田桂332複合地区議長（青森県・むつライオンズクラブ）に岩手県の山田町を紹介して頂き、炊き出しをやったのが始まりです。当時はとにかく、現地に行って何かをやることが大事だと思ったんです。時間がなかったので、理事会には事後報告になりました。でも、反対や反発もなかったし、逆に「いいことだ」って話になりましたね。

吉田　うちも似てますね。千葉県も津波や液状化の被害を受けた所が多かったですから。理事会を通していないのも同じです。会長自らが先頭に立ち、賛同するメンバーが動いていったんです。うちも反対は全くなかったし、関わらない人もいなかった。最初は福島県の猪苗代町にあった332-D地区の支援物資集積所の手伝いに行ったんですが、その後、被災地に直接入るようになりました。そうすると宮城県の石巻や南三陸のクラブから、必要な物資などの情報を得ることが出来、それを手分けして探し持って行くようになりました。

苗加（のうか）　うちのクラブは被災地から少し距離があるので、ちょっと違いました。情報もなかなか入ってこなかったので、当初は義援金でという話も出ました。でも、何か役に立てることが出来ないだろうかって話になって。クラブで年に1回、知的障害を持つ方の施設に炊き出しをやっているので炊き出しなら出来る、と。そこで福島の避難所に行きました。理事会を通して行いましたね。行く2日前でしたけど。炊き出しの前日には同行出来ないメンバーが中心となって、豚汁の具材を切りました。それくらいはしたい、ということで。

木村　最初に山田で炊き出しをした時、支援でおにぎりを千個持って行ったんですが、買うのではなく、メンバー自ら握りたいという気持ちがありました。この時、苗加さんのクラブと同じように、行けない人が積極的に手伝ってくれました。行けないけど、これなら出来るから、って。それで夜中の2時くらいからみんなで握って包装して出発したんです。でも、着いてもまだ温かかったみたいで、泣いて感謝してくださる方もいました。当時は賞味期限切れのものも出回ってた時期でしたから。

吉田　うちも、こっちで出来ることは、被災地に行けないメンバーが中心となってやってましたね。車や電車の線路も津波で流されていたので、被災者の移動手段として中古の自転車を持って行ってたんです。で、毎週土日には行けないメンバー中心にほぼ全員が集まって、中古の自転車を修理しました。あとは千葉のNHKが移転する時に、不要な事務机などを頂けるよう手配するとか、メンバーみんなでやっています。情報を集めて、その度に被災地に要るか聞くんです。で、必要なら持って行く、と。みんな自然に動いていますね。

東日本大震災に対する支援活動をきっかけに誕生した「緊急災害支援ネットワーク」（青森県・弘前東奥、岩手県・石鳥谷、福島県・田村、千葉県・大網白里、群馬県・高崎三山、愛知県・新城、富山県・上市、福井県・鯖江王山の8クラブ）の第1弾アクティビティ「サークル米」

自然と次はいつ行くんだ、という話が出て来る

——継続して支援をするのは、最初から決めていたんですか?

吉田　やっていくうちに、自然とメンバーみんながやらなきゃって気持ちになっていた感じです。ただ、組織として継続しようって方針を打ち出す必要があったので、年度が変わるに際して、復興支援室を設置しました。今も自然と次はいつ行くんだ、今度何するんだという話が出て来るんです。いつまでやるのかとか、いいのか悪いのかとか、そういう話は全然出ないですね。

木村　うちは継続しようって思ってなかったんですよ。

苗加　え、そうなんですか?

木村　4月、5月とメンバーが忙しい時期だったので、クラブとしての活動は最初の支援以来止まっていました。ただ、最初の支援がライオン誌に取り上げられ、福井県の鯖江王山ライオンズクラブから連絡があったんです。支援クラブでネットワークを作りたいって。京都で会合があるというので「まあ、行ってみようか」という感じで参加だけしてみたんです。そうしたら集まってるんですよ、全国の熱いライオンたちが。それを見て、これは本腰入れるべきだって変わりました。そのことを理事会で話したら、次期会長もやる気になって。で、継続するなら目的を持って、ちゃんとやろうという話になったんです。目的というのは、自分たちのクラブのスキルアップと、全国のクラブや被災地のクラブと支援を通してつながることでした。その後、年度が替わって復興支援の委員会を立ち上げました。他にも必要なアクティビティがあるので、委員会分けして、ちゃんと動けるようにしたんです。そうしたらお互いに刺激し合って、復興支援以外の活動も活発になりました。

ライオン 木村知紀

苗加　逆にうちは最初から継続してやるぞ、という気持ちから始まりました。被災直後に限らず、1年後、2年後、3年後と、それぞれ必要なことがあるだろうと思って。今はもうアラートの時期は終わり、これからは何が求められているのかを探っていかなければいけないですね。必要とされる時期に必要とされる支援を行うことが大切ですから。

話を聞くだけでも心のケアになる

——例えば、どういう支援が重要でしょうか?

苗加　今後は心のケアが重要かな、という気持ちがメンバーの中にあります。阪神・淡路大震災の時も話題になりましたけど。

吉田　そうですね。まあ心のケアと言うと大層なものに感じますが、被災地のお年寄りは話がしたいらしいんですね。だから話を聞くだけでも、ものすごく心のケアになるみたいです。あと、石巻辺りには仮設住宅に入っていない方も多いんです。1階は津波でやられたけど、2階は何とか住めるから仮設に入るのも申し訳ないって。そういう所には何の物資も届かないし、ボランティアも来ない。だから、そういう所に行って、話を聞くのも大切ですよね。

ライオン 吉田国代志

木村　行くと、もうずっと話してますからね。終いには手を握ってね。「もう帰るんですか?」って。

吉田　同じ被災地でも結構差がありますよね。どうしても大きな仮設住宅ばかり回っちゃいますから。2011年の夏にあちこちでかき氷をやった時なんですけど、一人のおばさんに「うちの方でもやってくれない」って声掛けられたんです。それで「いいですよ、どこですか?」って聞いたら「うちの所はね、小さすぎて誰も今まで来てくれていないのよ」って。それで、それからは小さい所専門に行くようにしてます。

木村　心のケアというか、元気付けになればと、一度よさこいチームを連れて行きました。すると、とにかく人が集まるんですね。街灯が全然つかない時期で、発電機持って行って踊ったんですけど、暗い中、千人くらい集まりました。こういう支援も必要とされていると思います。でも単一クラブだとなかなか出来ないですから、他のクラブと上手く組んでやれたらな、と思っています。

苗加　それはそうですね。うちは主に高岡と福島県の聾学校さんを結び付けることをやっています。福島の子どもたちはなかなか外で遊べないなどストレスがあるので。物理的な

被害だけでなく、原発の問題が状況を複雑にしている面もありますし。

吉田　今考えてるのが、支援の際に子どもたちや、現地に行ったことのない人に同行してもらって、現地を見せること。だいぶ片付いてきましたけど、やっぱり初めて見る人は言葉を失うような光景ですから。

木村　それは言えますね。

苗加　私たちは、クラブで津波を受けた所には行っていないので、こうやって情報交換をして、また自分たちの出来る支援をやりたいですね。

ライオン苗加康孝

何していいか分からないなら、まずは行ってみる

――周りの、地区やゾーン、リジョンとの連携はありますか？

吉田　そんなに回数は多くないですけど、2度程募金活動をやりましたね。あと、被災地の特産品を販売する時なんかは買いに来てくれます。この間、ガバナー公式訪問の時にタオルが10本くらい余っていたんですが、それが8万円ぐらいになっちゃいました。

福島県立聾学校の子どもたちを富山に招待。立山散策やバーベキュー、高岡聴覚総合支援学校との交流を楽しんでもらった

富山県・高岡志貴野ライオンズクラブ
室谷博久会長／58人／1967年5月12日結成

震災後、4月初頭に福島県で600食分の豚汁の炊き出しと、スニーカーや衣料品など支援物資の提供を行った。その後、福島県・郡山南ライオンズクラブを通じて福島聾学校へチューリップの球根を贈呈。2012年4月にはチューリップの開花の時期に合わせて高岡聴覚総合支援学校の子どもたちからのメッセージを持参し、贈呈。また、8月には福島聾学校の子どもたちを立山に招待、放射線量などの関係で外で自由に遊べない子どもたちの心の支援となるようにした。その際、高岡聴覚総合支援学校の子どもたちとの交流会や、ライオンズの森での植樹体験など、子どもたちにとって思い出となるような支援活動を行った。また、11月にも再度チューリップの球根を贈呈、メンバー有志で福島県を訪問した。

苗加　すごいですね。

吉田　行くのはお前ら若い者だからって、お金の面ではかなり協力して頂いてるんです。あと、物は出せるんだけど行けないから、って託されることもありますね。

木村　なるほど。うちは一緒に何かやろうってことはあまりないですね。

苗加　そうですよね。

木村　次の課題はそこだと思います。一緒にやれば大きな支援も出来ますし、交流があると次の災害への備えにもなると思うんです。被災地支援に携わってから、そういう意識が強くなりました。福岡のOSEALフォーラムで開催されたアラート・ミニフォーラムは、その意味でもすごく意義があったし、被災地の近隣とか遠方っていう設定でディスカッション出来たのも良かった。置かれた立場によって、やるべきこと、やれることが違うと思うんです。ミニ・フォーラムは、そういう具体的なシチュエーションを多くの人が考えるきっかけになったと思います。

苗加　当然、物理的に行けないクラブもあるでしょうね。それを踏まえて、地区などで連携して大きな支援をするのは良いですよね。他クラブ

の活動を参考にして支援するのも良いですし。

木村　それはありますね。自分たちのクラブでは難しい問題でも、他のクラブでは簡単に処理してくれることがありますし。

吉田　あとはやっぱり被災地のクラブとの交流も大事ですね。

木村　そうですね。1回とか2回行っただけだと、どうしても「お客様」になっちゃいますが、回を重ねると、本音を聞くことが出来ますね。

吉田　2カ月くらい行かなかったら「次いつ来るんだ」って言われちゃいますよ（笑）。

苗加　うちはちょっと遠いのもあって、頻繁にというわけにはいきませんが、福島のクラブとは交流が続いています。向こうに行くと、わざわざあいさつに来て頂いたり、こちらの例会に招待したり。

木村　そうやって交流を続けていくことは大切ですよね。でも残念ながら、東日本大震災の被災地支援に対して、ちょっとずつ冷めていってるところが増えている気がするんです。

吉田　まだやってんのって言われますからね。

木村　何だよ、悪いか、って思いますよ。このぐらいやったらいいだろう、っていうのはないわけですから。

千葉を代表する夏の恒例行事「千葉の親子三代夏祭り」で岩手、宮城、福島３県の支援に役立てるため物産や復興グッズを販売

千葉ネオ ライオンズクラブ
石井誠一会長／43人／1997年6月23日結成

震災発生直後から千葉県でも被災地となった旭市で泥やがれきの撤去作業に従事した。八複合地区ガバナー協議会の支援活動にも参加、その後は市民から中古自転車を募集し、クラブで修理、整備をして送り届ける活動を続ける。また、並行して仮設住宅での炊き出しや、岩手県南三陸町の清水寺の清掃、補修も行う。５月に竹やぶの中から発見された船、清水丸を８カ月かけて補修、震災からちょうど１年が経った2012年３月11日、復興丸として進水式を行うなどアクティブな支援を実施。2011年８月には被災地の特産品を千葉県内のイベントで販売するなど、幅広い支援を行ってきた。その後は千葉県内で事業者の引っ越しなどで出る事務机などを回収して被災地に届けるなど継続して被災地支援を行っている。

苗加　そうですよね。

吉田　周りから何と言われようと、うちは間違いなく続けますけど。

苗加　うちも支援を続けていかなければいけないと思っています。

木村　むしろ何でやらなくなってるのかが不思議ですね。行くと、被災地の人の本音を聞くじゃないですか。すると、現状がまだまだひどいことも分かるし、やらなきゃって使命感に燃えてくるはずですよ。だから、何やったらいいか分かんないってクラブは行ってくればいいんです。

吉田　そう、とりあえず行ってこいって。

木村　今でもやるべきことがありますから。で、現地に行くならクラブを訪問してほしいです。もちろん相手の負担にならないようにですけど。クラブ同士でつながれば、自然と何回も行くようになります。役場とかに行っちゃうと、「1回行ったからもういいでしょ」ってなりがちです。だから、支援をしたことのあるクラブは被災クラブにもう一度行ってもらいたいです。その後どうしてますか?って。多分、何も変わっていないはずです。

吉田　それに、被災地に行ってお金を使うのも、立派な復興支援になりますから。

被災地支援活動を通じてクラブ内が活性化

――被災地の支援活動をしていて、クラブ内の変化はありましたか？

木村　クラブが活発になりました。支援活動をやりたい気持ちがあるなら、今からでも取り組んでほしい。うちのクラブで言えば、復興支援を通して全国のライオンズと知り合い、いろいろな所を回るようになりました。例会だって今までより多くドネーションが集まる。若い人が一生懸命やってる姿を見て、上の世代も応援してくれているんです。みんな熱い思いがあるから良い雰囲気になってます。例会の出席率も良いですよ。みんな使命感があるし欠席者も少ないから、物事がすぱっと決まるんですよね。だから、例会が楽しいです。

吉田　うちはメンバーが増えました。震災前は30人弱だったんですが、今43人です。支援活動を手伝ってくれた方や「一緒にやらせてくれ」っていう方がいて、劇的に増えました。例会出席率もほぼ100％で、メンバー間の絆も深まったと感じます。もともとは若いメンバーで集まって楽しくやろうって感じで出来たクラブだったんですよね。でも、徐々にキャビネットに人材を出すようになり、クラブとしての形が出来たところに震災が起きたんです。ですから、みんな違和感なく奉仕活動が出来るようになりました。あとは地区内でのクラブの立ち位置が変わってきましたね。昔はお荷物だったんですが、今では募金を任されるまで信用されるようになってね。これは続けなきゃダメだな、と余計にバックギアが入らなくなっちゃっています（笑）。

苗加　うちも活性化した点はありますね。復興支援は最初、若いメンバ13人で毎日集まり話し合っていました。クラブの意向が決まる前から被災地に行ったりもしました。でも今では、君たちは我がクラブの三銃士だ、みたいに言ってくれる方もいます。被災地支援は今までと違う活動で、新鮮な面もありますし、地域を飛び出したアクティビティも必要なのかな、と思うきっかけにもなりました。今日こうして皆さんとお話が出来て、更に視野が広がりました。

木村　せっかくこうやってお会い出来たんですから、協力してやれることがあればやりたいですね。まだ被災地は大変ですから。

吉田　そうですね。情報交換を含めて、今後、連携して被災地支援を続けていきましょう。

桜の名所・弘前の花見に欠かせない津軽地方定番の季節食カニ汁の炊き出しのため、ジャンボ鍋を持って岩手県山田町を訪問

青森県・弘前東奥ライオンズクラブ
齋藤弘臣会長／53人／1971年2月15日結成

震災発生後の４月に岩手県山田町でカニ汁千杯、おにぎり千個の炊き出しを実施したのを皮切りに、支援を継続して行っている。７月には鯖江王山ライオンズクラブの呼び掛けに応じ、「緊急支援ネットワーク」を立ち上げる。この会議でネットワーク参加クラブが米を提供し、仮設住宅に配る共同支援活動「サークル米」をスタートさせた。９月にはサークル米の活動を実施、同時に「よさこい　花嵐桜組」のストリートライブも開催し、千人を超える被災者が集まった。その後もサークル米の活動を続けると共に2012年２月には弘前青年会議所が主催する「笑顔プロジェクト」にも全面的に協力。６月には陸中山田ライオンズクラブと友好クラブ締結調印式を実施。更に被災地に桜を植樹する「絆の桜プロジェクト」を始動させた。

被災地のライオンズは今

岩手県・釜石、大槌、陸中山田ライオンズクラブ

ライオン誌委員会で岩手県沿岸部の被災地を訪問

ライオン誌日本語版委員会では東日本大震災の情報を積極的に発信している。今月号の特集「追跡・東日本大震災」は第3弾であり、本欄も2011年7月号から連載を続けている。また被災クラブに対しては特別負担金と送料を免除し、無償で本誌をお送りしている。

そんな中、今後も継続的に情報発信をするため、委員会として現地を視察し、併せて被災地の皆さんから直接お話を伺えないかとの提案が出された。そこで、前年度のライオン誌委員である、岩手県釜石市の種市一二元地区ガバナーに打診をしてみたところ、1月8日に新年例会を開くので、そこに出席頂けないかとの回答であった。たまたま翌9日にライオン誌委員会を予定していたことから、願ったりかなったりと、有志での訪問が実現した。

私は同期のガバナーを務めた、福島市のライオン熊坂英二からの情報に加え、新聞やテレビの報道、更には書籍などから厳しい被害状況はある程度把握していた。しかし、現実はどうなのか。被災した人たちや現地で復興に関わっている人たちから直接話を聞きたいと思っていた。その一方、あまりの被害の大きさに、私たちが入っていくことで迷惑を掛けてしまうのではないか、そんな思いもあった。が、被災の日からもうすぐ2年の月日が経つ。これから私たちに何が出来るのか、何をしなければいけないのか。それを自分の目と心でしっかりと認識し、自分の地区の会員の皆さんにも伝えていけたらとの思いから参加させて頂くこととした。

東北新幹線新花巻駅から、はまゆり号に乗り替え釜石へ。遠野駅を過ぎる頃まで積もっていた雪も、釜石市が近付くにつれて薄れていった。新花巻駅で買った駅弁のおいしさと列車内が暖かいこともあり厳しさを忘れた頃、釜石駅に着いた。

駅に降り立つと種市元ガバナーが待っていてくださり、早速、マイクロバスで釜石ライオンズクラブの事務局へと向かった。

釜石ライオンズクラブ事務局でライオンズの被災状況と、被災者に対する支援活動などについて説明を受ける

事務局の建物はトレーラーハウスで、車輪こそ付いていなかったが、牽引するための金具などもそのままで、なるほどと納得。中は結構広く、20人程の会議は行えそうだった。LCIFの支援で昨年1月31日に開設され、家族会員11人を含む釜石ライオンズクラブ会員30人と、はまゆり支部の会員44人のライオンズ活動の拠り所となっている。はまゆり支部は、ライオンズクラブが支援した「はまゆり飲食店街」の経営者で組織されている。

周囲を見渡すと、以前は町の中心部であった痕跡はあるものの、建物はほとんど残っていない。地盤沈下により、事務所の前の大通りは大潮の満潮時には海水が上がってくるという。が、埋め立てな

鵜住居駅ホーム跡から、釜石市鵜住居地区の被災状況を視察する

東日本
大震災

山田町織笠地区。津波は山田湾から織笠川をさかのぼった

どの計画の遅れが、いまだ解決していないそうだ。種市元ガバナーの話では、釜石周辺の土地は堅い岩盤で、地震による被害はほとんどなかったが、逆に今後埋め立てをするための土がままならないとのことだった。再開発はまだまだ先との感じで空き地ばかり、夜になっても灯りのともらない町の姿は非常に辛い。

その後、332‐B地区が建立した震災慰霊碑にご案内頂いた。碑には、震災で亡くなられた地区内11クラブ21人のライオンと大槌ライオンズクラブ事務局の女性の名前が刻まれていた。「あなたを忘れない」と銘打った心の込もった石碑に、

大槌町城山にある「3.11大槌希望の灯り」モニュメント

寂しさはあっても温かなものを感じたのは、私だけではないだろう。

その後は海岸線を北上しながら、釜石市の鵜住居（うのすまい）地区、大槌町、山田町と視察させて頂いた。鵜住居地区は大槌湾に面し、釜石市内の犠牲者の半数がこの地域の方だったという。周囲を望むためJR山田線鵜住居駅ホーム跡に上がったが、ここが駅であったとはとても思えない惨状だった。が、そこから見える釜石東中学校と鵜住居小学校の両校は、在校していた約600人の子どもたち全員が無事に避難した。その時の行動は「釜石の奇跡」としてマスコミなどでも大きく取り上げられたが、今後、災害時における貴重な教訓となることだろう。

大槌町、山田町は市街地が津波で流されただけでなく、火事によって大きな被害が出ていた。釜石へ戻る途次、大槌湾と大槌の市街地を望む城山に寄り、大槌ライオンズクラブと福井県・敦賀みなとライオンズクラブが合同で建立した「3・11大槌希望の灯り」を見学した。阪神・淡路大震災の復興を祈念した「1・17希望の灯り」から分灯されたというこの灯りが、まさに希望の灯りとなり、美しい自然と人々の笑顔が1日でも早く戻ることを心から願い祈りを捧げた。

そして夕刻からは、釜石、大槌、陸中山田3クラブの合同例会及び新年会に同席させて頂き、被災クラブの皆さんと友好を深めることが出来た。その中で釜石ライオンズクラブの田端一行会長は、WHOの調査によると、被災者の実に63%がうつ傾向にあるとの報告があり、この失望を希望に変えていくことが、私たちライオンズクラブの仕事だと話された。

限られた時間の中で、視察させて頂いた場所は被災地のほんの一部でしかない。が、直接その場に行き見聞出来たことは、私の人生やライオンズとしての取り組みにも大きな影響を及ぼすだろう。

最後に、遠景ではあったが、静かに穏やかな三陸の海を丘の上から見守る釜石大観音の姿が、今も目に浮かんでいる。

お世話になった皆さんに感謝しつつ。

（ライオン誌日本語版委員／田崎登保）

釜石、大槌、陸中山田3クラブ合同例会の最後に出席者全員で手をつなぎ、「また会う日まで」を合唱

■国際理事
高田順一
(富山昭和)

国際理事2年目、全力疾走中

釜山国際大会でお会いした何人もの元国際理事から、「理事の2年目の時間は1年目よりももっと速く過ぎるよ」と忠告を頂きました。私は2年目理事としてマデン国際会長から会員増強委員長、女性及び家族会員タスクフォース委員、OSEALフォーラム担当リエゾン、そして5年目となったGMTエリア・リーダーに任命されました。その他に日本においては、山田實紘国際第2副会長候補者支援委員長の重責も頂きました。

それぞれの役割において得難い経験をさせて頂き、とても感謝をしていますが、残りわずかとなった任期を前に、先輩方の忠告の重さを実感しています。

1月8日、ライオン誌日本語版委員会の皆さんと岩手県釜石市を訪問しました。釜石駅では種市一二元地区ガバナーに出迎えて頂きました。釜石ライオンズ(クラブ)が事務局として使用しているトレーラーハウスでクラブ三役にお会いし、その後、釜石市内と隣接する大槌町、山田町を視察しました。

巨大地震のエネルギーを運んだ津波が、リアス式海岸の奥深くまでもたらした被害は想像をはるかに超え、市街地はどこも壊滅状態でした。将来津波が来る可能性のある地域は、かさ上げ工事をしなければ居住区として利用出来ません。山々に囲まれた狭隘(きょうあい)な街に都市計画を立案することは、並大抵のことではありません。自治体の強力なリーダーシップと市民の理解、そして国の支援が不可欠と感じました。

その夜は釜石、大槌、陸中山田ライオンズ(クラブ)の合同新年例会に参加しました。私は視察の感想を述べ「長期にわたる復旧に向け、国際協会、日本ライオンズはこれからも皆さんの力になります」と約束致しました。釜石駅近くにはタム前国際会長の決断でLCIF交付金が投入されたプレハブの「呑ん兵衛横丁」があり、分散して二次会を行いました。そこで出会った人たちの心持ちの明るさと強さに、私は釜石の将来は大丈夫と確信致しました。呑ん兵衛横丁の経営者の皆さんはライオンズの支援に感謝し、釜石ライオンズ(クラブ)のクラブ支部会員になっています。

1月15日、第42回中南米及びカリブ海地域フォーラム(FOLAC)に参加するため成田空港を発ちました。アメリカ・ロサンゼルス、ペルー・リマ、チリ・サンティアゴを経由し、30時間掛けて目的地、チリ北部の都市アントファガスタに到着しました。アントファガスタは太平洋に面したリゾート地で、人口28万人の街です。今回のFOLACには20カ国から1200人が参加しました。

開会式は午後8時~10時半、その後のディナーは日付が変わるまで終わりませんでした。中南米各地では日本からの移民の子孫が活躍されています。それ故とても親日的です。日系の役員から日本語で「山田がんばれ、日本がんばれ」というエールと、山田候補者に対する推薦決議も頂きました。

ライオンズニュースカセット

NEWS CASSETTE

新年度に向けて第1副地区ガバナーのGLTエリア研修会

2月1日、東京都中央区の銀座ブロッサムで、第1副地区ガバナーのGLTエリア研修が開催された。第1副地区ガバナーの事前研修は今年度から、複合地区研修会、オンライン事前課題学習、GLTエリア研修、地区ガバナー・エレクト・セミナーの4段階で行われている。国内35地区の第1副地区ガバナーは、11月に東西に分かれて4複合地区合同で行われた複合地区研修会とオンライン事前課題学習を修了し、この日のGLTエリア研修に臨んだ。研修は11時から17時まで行われ、セッション1「GMT／GLTの一員としての取り組み」では両チームの組織や地区ガバナーの役割を確認。セッション2「会員増強ワークショップ」は国際理事会会員増強委員会の委員長を務める高田順一国際理事が、セッション3「指導力育成ワークショップ」はGLT会則地域副リーダーの後藤隆一元国際理事がそれぞれ講師を務め、複合地区ごとの討議でアイデアを交換した上で、各自が次年度の会員増強並びにリーダーシップの目標と行動計画を立てた。高田国際理事は「地区ガバナーは会員増強のキーパーソン」と述べると共に、「実際に会員増強と維持、エクステンションに取り組むのはクラブ。クラブをしっかりと支援してほしい」と述べた。国内研修を終えた第1副地区ガバナーは、ハンブルク国際大会直前の7月3日～5日に行われる地区ガバナー・エレクト・セミナーを修了し、9日の国際大会閉会式で晴れて地区ガバナーに就任することになる。

タイ・バンコクで上位ライオンズ・リーダーシップ研究会

1月11～14日、タイ・バンコクのロイヤルオーキッドシェラトン・ホテル＆タワーにおいて、国際協会主催の上位ライオンズ・リーダーシップ研究会（ＡＬＬＩ＝Advanced Lions Leadership Institute）が開かれた。この研究会は地区レベルで指導的役割を担うためのスキル向上を目的に、毎年1回、会則地域ごとに行われる。今回、日本の参加者は第1副地区ガバナー19人、第2副地区ガバナー12人を含む32人。講師はＧＬＴ会則地域副リーダーの後藤隆一元国際理事と、２０１１年に講師育成研究会を終了した佐藤宜之元337・Ｂ地区ガバナーが務めた。3日間の日程を終えた佐藤講師は次のように語り、参加者のリーダーシップ発揮に期待を寄せている。

「最初は緊張した雰囲気だった研究会は時間が経つにつれて活気を帯び、情熱的なディスカッション、ユーモアに富んだ発表と、皆さんエネルギー全開で真剣に取り組まれました。この研究会で、いろいろなテーマについて考え、討論し、自分なりのリーダーシップを形成されたと思います。今後この経験を生かし、自らのスキルを向上させると共に、後に続く若い有能なライオンの育成に力を注いで頂いて、日本のライオンズの発展に寄与してほしいと思います」

公立小野町地方綜合病院でホールボディカウンター検査室開所式

1月10日、福島県小野町の公立小野町地方綜合病院で、内部被曝線量を測定するホールボデ

ハンブルクへ行こう！　第96回ライオンズクラブ国際大会情報

■ドイツ・ライオンズ交響楽団による歓迎

ハンブルク国際大会で、ドイツ・ライオンズ交響楽団が演奏することが決まった。2010年に結成されたこのオーケストラは、ドイツ全土から集まったおよそ40人のライオンズから成る。演奏が行われるのは大会初日の7月5日、大会登録や代議員資格審査の窓口が置かれるハンブルク・メッセ＆コングレス（HMC）で午前と午後の2回。更に第1回総会（開会式）終了後の7日午後にはコングレスセンター・ハンブルク（CCH）で、30分間の演奏が行われる。演奏の開始時刻については、発表があり次第、本欄に掲載する予定。

2013年7月5日～9日　ドイツ・ハンブルク

■平和ポスター・コンテスト25周年を祝う

国際本部のPR及びコミュニケーション部では、国際平和ポスター・コンテストの25周年を祝うイベントを企画している。青少年プログラムの一つとして、子どもたちに平和の尊さを考える機会を提供するコンテストが始まったのは1988-89年度。今年度のコンテストで、25人目の大賞受賞者が決まった。ハンブルクでは開会式でこのコンテストに関するプレゼンテーションが行われる他、展示ホール内ではこれまでの沿革を追う特別展示が用意される。また7日には展示ホール内の発表ステージで、過去の大賞受賞者たちが自らの体験談を語り、今年度の大賞受賞者によるサイン会も行われる。

■レオとライオンズが一堂に集うサミット

7月5日10～16時、HMCでレオ・ライオン・サミットが開かれる。参加するレオやライオンは、1対1の対話やワークショップ、スピーチなどを通じて、レオとライオンズがより良い関係を構築するために重要な役割を果たす。参加を希望するライオンは、サミットのチケットを購入する必要がある（座席数に限りあり）。

■元ファーストレディーによる基調講演

ハンブルク国際大会で基調講演を行うのは、アメリカの元ファーストレディー、ローラ・ブッシュ氏。世界におけるさまざまな問題に対する自らの取り組みを語る。日程は発表があり次第、本欄に掲載する予定。

＊本欄掲載のプログラムには変更が生じる場合があります。日時や会場は現地で配布される大会プログラムで確認してください。

イカウンター（HBC）検査室の開所式が行われた。HBCは332-D地区（福島県／坂本勇地区ガバナー）が、LCIFの東日本大震災指定交付金を活用して寄贈したもので、前日9日の川俣町、昨年10月の郡山市に次いで3台目となる。小野町地方綜合病院は、いわき市、田村市、小野町、川内村、平田村の2市1町2村で構成される公立病院で、近隣地域の中核病院となっている。公立小野町地方綜合病院理事長として開所式に出席した宍戸良三小野町町長は、「1月15日から運用を開始し、1日20人程度の検査を実施する予定です。構成市町村管内には約39万人が暮らしており、それら住民の放射線による健康不安の解消と、今後の健康管理に役立つものと、非常にありがたく思っています。2年後には新病院の開設が予定されていますが、そちらでも有効に活用させて頂きます」

と話していた。また、この日はちょうど小野町ライオンズクラブ（吉田代吉会長／20人）の45周年記念例会の日に当たっており、坂本地区ガバナーらキャビネット役員は「まるでタイミングを合わせたよう」と語り、同クラブ会員らと喜びを分かち合っていた。今回の事業は本誌昨年12月号（被災地のライオンズは今）で既報の通り、日本病院会の協力で実施され、HBC3台の他、甲状腺超音波画像診断装置4台と、それを積載する移動検診車2台（3月納車予定）を含め、事業総額は約2億6千万円に上っている。

オリンピック・パラリンピック招致目指す東京での街頭署名活動

330-A地区（東京都／阿久津隆文地区ガバナー）は今年度、オリンピック・パラリンピック招致支援委員会を設置し、2020年東京オリンピック・パラリンピックの招致を目指して支援活動を展開している。昨年10月8日には東京都庁前都民広場において、ロンドン・オリンピックで活躍したレスリングの米満達弘選手や小原日登美選手を始め歴代の金メダリストと子どもたちが交流する「ライオンズの集い」を開催。また12月からは地区内各ゾーンでオリンピック・パラリンピック招致の街頭署名活動を行っている。「各クラブは会員や家族など関係者の署名を募っているが、それだけでなく街に出て直接市民に呼び掛けることに意義がある」と話すのは、同委員会の池田和司委員長。1月26日には買い物客でにぎわう数寄屋橋、渋谷、吉祥寺、府中、町田の街頭で署名への協力を呼び掛け、1日で6500人分が集まった。この日、都内5カ所の会場を回った阿久津地区ガバナーは、「厳しい寒さの中、どの実施場所でも熱心に署名を呼び掛け、通行人の方々の関心も高く、多くの署名が集まりました。オリンピック・パラリンピック招致のPRはもちろんのこと、ライオンズクラブの奉仕活動のPRにも大きな成果があったと思います」と話していた。

ライオンズの10年後を考える330-C地区のセミナー

1月25日、埼玉県さいたま市の清水園で、330-C地区（埼玉県／中村泰久地区ガバナー）の「マスターズ・セミナー」が開催された。地区内クラブのベテラン会員を対象にしたセミナーで、61クラブ156人が参加。「これでいいのかライオンズ」のセミナー・テーマの下、グループ・ディスカッションが行われた。同地区は地区内会員の平均年齢63・5歳という現状に危機感を抱き、今年度は若手会員育成を重要課題としている。特に会員のワークショップ研修に力を入れて、「10年後もライオンズクラブが活発であるためには」の共通テーマで、会長セミナーや8回にわたるリジョン単位の会員セミナーを実施してきた。今回の「マスターズ・セミナー」は、クラブで指導的立場にある会員の意識改革を図ろうと企画されたもの。中村ガバナーはセミナー冒頭のあいさつで、「経験豊富な皆さんは地区の財産。今期は若手育成に力を注いでいるが、地区の発展には若手とベテランの融合は不可欠だ。ぜひ皆さんの知識と経験を継承してほしい」と述べて、若手育成に積極的に関与するよう促した。

グループ・ディスカッションでは、会員セミナーで浮き彫りにされた「会員数」「例会」「人間関係」「アクティビティ」の問題点について、解決策を話し合った。各グループによる発表の後、来賓として出席したGLT会則地域副リーダーの後藤隆一元国際理事が講評を述べ、「10年後をしっかりと考え前に進んでいこうという情熱に敬意を表する。現状を改善していかなければ、10年後はない。今日の議論をこの後どう生かしていくかが大切だ」と話した。

会議録

■**第5回複合地区ガバナー協議会議長連絡会議**（12月14日／日本ライオンズ連絡事務所／出席者：河合悦子、中嶋辛、田畑英伍、高田浩、杉浦均、奥村啓二、寺越慎一各議長、橋口丸夫副議長、高田順一、武久一郎両国際理事）①財団設立の可能性について（331複合地区）②議長の職責について③日本ライオンズ連絡事務所運営関係④第96回ハンブルク国際大会（2013年7月5日～9日）⑤委員会・会議報告⑥奨学金関連報告事項報告（332複合地区、332-C地区）⑦東日本大震災復興支援対策のお願い（332複合地区）⑧リーディング・アクション・プログラム（RAP）キャンペーン⑨講師育成研究会（FDI／2013年台湾・台北）⑩その他

■**第5回東日本大震災復興支援対策本部会議**（12月14日／日本ライオンズ連絡事務所／出席者：山浦晟暉元国際理事、高田順一、武久一郎両国際理事、河合悦子、中嶋辛、田畑英伍、高田浩、杉浦均、奥村啓二、寺越慎一各議長、橋口丸夫副議長、千葉龍二郎、佐藤義則、坂本勇各地区ガバナー）①前回会議要録の確認②332複合地区からの新規申請③各種報告④東日本大震災復興支援対策のお願い（332複合地区）⑤その他

■**第6回ライオン誌日本語版委員会**（1月9日／ライオン誌日本語版事務所／出席者：高田順一、武久一郎両国際理事、久津間康允、茂尾実、中居雅博、小西宗仁、矢口武克、団英男、組嶽晶一、田崎登保各委員、辰巳博昭〈オンライン〉、小柴登司〈オンライン〉両ITアドバイザー）①ライオン誌日本語版事務所の運営②2013年1月号（10万1000部発行）出来③2月号記事内容の確認④3月号以降台割（案）と主要記事予定⑤若手会員フォーラム⑥その他

新結成／解散クラブ

■**新結成クラブ**

大阪マザーVB（石岡節子会長）▼1月3日認証▼スポンサー／大阪堂島

GMT／GLT通信

二つのチームが連携して
クラブの活性化と発展を担う

会員増強を使命とするGMTと、指導力育成を使命とするGLTは、互いに連携しライオンズの発展に向けて前進することから、車の両輪に例えられる。両チームが連携して成果を上げている地区の事例を紹介する。

●

332・D地区（福島県／坂本勇地区ガバナー）のGMTとGLTは、「クラブサクセス・ワークショップ」を活用してクラブの活性化と会員増強を図ることを今期の活動方針としている。そこで、昨年7月に両チーム合同でゾーン・チェアパーソン会議を開き、その方針を説明。クラブ・レベルまで浸透させるために、地区、ゾーン、クラブの各レベルでワークショップを開いた。「クラブサクセス・ワークショップ」はブレーン・ストーミングとグループ・ディスカッションで構成されている。これらの手法に慣れていない場合、1回のワークショップ体験だけで、そのノウハウをクラブに持ち帰り実行に移すのは容易でない。そこで、各レベルのリーダーには繰り返し参加して、グループ・ディスカッションの進行を担うリーダー役も体験してもらった。8月に地区ガバナー・チームとゾーン・チェアパーソンを対象に実施した後、10月にはゾーン・チェアパーソンがグループ・リーダーを務めて、地区内全クラブの会員委員長を対象に実施。更に11月から12月にかけて、各リジョンまたはゾーンごとにクラブ3役を対象に行って、この時は会員委員長がグループ・リーダーを務めた。

こうした体験を踏まえて、今後は各クラブでワークショップを行い、退会防止や会員増強のために具体的な行動計画を立案、実行することを目指している。

この他、新会員向けのオリエンテーション資料の作成にもGMTとGLTが協力して取り組んでいる。11月の地区ニューメンバー・スクールのオリエンテーション資料としてDVDを作成。二瓶克雄地区GLTリーダーによれば、両チームのメンバーが9月から週1回のペースで編集会議を持ち、10月末に16分間のDVDを完成させた。今後はゾーン・チェアパーソン研修用のDVDも作成する計画だ。

334・D地区（富山県・石川県・福井県／木村正明地区ガバナー）でも、GMTとGLTが協力して資料を作成。昨年3月に会員活動準備テキスト『ライオンズクラブ活動の指針』（6ページ）を発行し、今年度のクラブ3役セミナーで全クラブに配布した。

●DVD「新入会員用オリエンテーション」
332-D 地区（TEL：024-937-0830
E メール：info@lc332d.com）
●冊子『ライオンズクラブ活動の指針』
334-D 地区（TEL：0766-56-6601
E メール：info@334d.com）
どちらも残部があるので、入手希望の場合は地区キャビネット事務局へ連絡を

1月26日に開催された335複合地区LCIFセミナー
写真提供／ライオン出田秀（大阪府・豊中千里ライオンズクラブ）

LCIF Development Update

335複合地区 LCIF委員会報告

335複合地区では本年度の目標を、以下のように定めた。

●各準地区でイエローフラッグを最低1クラブ取得する。

●3年間で、335複合地区メンバー全員が20ドル献金をする。

●全クラブについて20ドル献金とMJF献金ごとの一覧表を作成する。

●335複合地区LCIFセミナーを開催する。

●7月1日～11月末日の間で、最も献金額の多い会員を各準地区で3人表彰する。

そして目標達成に向け、委員会を3度開催。各地区においても活発な活動が展開されている。

335-A地区（西村和洋委員）

●2012年8月8日、各クラブ会長・幹事出席の下、LCIFセミナーを開催した。

●20ドル献金を全会員が達成出来るように更に呼び掛けていく。

335-B地区（中谷豊重委員）

●キャビネット方針として20ドル、50ドル、100ドル献金の三つのうちいずれかの献金を、8月28日付でガバナーと地区委員長連名で各クラブ・メンバーに依頼した。

●地区全体でMJF献金440万ドルが目標。LCIF交付金の活用をPRしたい。

335-C地区（中井正紀委員）

●毎年の地区年次大会で一人20ドル以上の献金を決議している。

●チャーター・ナイト記念事業の一環としてMJFに取り組んで頂きたい旨の文書を該当クラブに依頼した。

●LCIF例会をして頂きたい旨要請し既に3クラブが開催、LCIFの仕組み等について説明して頂いている。

●京都東ライオンズクラブは200%MJFを達成された。

335-D地区（有野勇委員）

●「はしかを根絶するために」の資料と献金依頼文書を全クラブに配信した。

●第3リジョン全クラブを例会訪問、12クラブ全会員の20ドル献金の同意を得た。

●11月末現在、MJF・PMJF52口、20ドル献金全会員達成クラブは45クラブである。

●キャビネット会議や諮問委員会等々でLCIF交付金利用もPRしている。

（335複合地区LCIF委員長／新宅元之）

Foundation Impact

南アフリカのオープニングアイズ・プログラム

昨年10月、スペシャルオリンピックス（SO）アフリカの大会が南アフリカで開催され、13カ国が参加した。大会最初の競技となったサッカーの会場ではアスリートを対象に視力検査が提供され、多くのアスリートと家族が参加。そこには、奉仕活動に励むライオンズの姿があった。

LCIFとSOは12年間にわたり、オープニングアイズ・プログラムを実施してきた。プログラムでは、アスリートの視力検査を実施し、提携企業の協力の下、必要に応じて眼鏡が無償提供される。眼鏡を手にしたアスリートは、更に多くのスポーツイベントに参加する機会を得ることとなり、毎日の生活をより健やかに過ごすことが出来るのだ。

LCIFはこの活動に1340万ドルの交付金を拠出し、1万

6千人以上のライオンズが世界各国で視力検査のサポートに尽力。今日まで、25万5千人のアスリートがオープニングアイズを通して視力検査を受けている。

大会期間中、ライオンズは150人以上のアスリートに視力検査を実施、地域の医療関係者6人に対する実習も併せて行った。更に南アフリカのライオンズはLCIFとSOの協力の下、障害者の家族や介護者に役立つ情報を提供、アスリートや家族が抱える問題の克服や、地域の健康教育などに努めた。

オープニングアイズ・プログラムの会場で、南アフリカのライオンズを代表してスピーチを行ったライオンドゥ・プルーイは、

「このイベントに参加出来たことは私の人生にとって最高の出来事でした。私はライオンズクラブの会員であることを誇りに思います。この場所で、このような体験が実際に出来たということが何よりもすばらしかった。ライオンズクラブの活動全てに畏敬の念を抱いています」

と語った。会場には、ユニセフの南アフリカ代表や国賓、元NBAプロバスケットボール選手で現SO世界大使なども訪れ、アスリートを声援、健闘をたたえた。まさに、大勢の人々の努力により、参加者が一つになるイベントとなった。

（アリー・ストライカー）

SightFirst Update

失明との闘いを強化する

世界保健機関（WHO）によると、現在、世界では1分ごとに1人の子どもが失明しているが、それらの失明の40%は予防または治療が出来るという。

成人においては糖尿病による失明のリスクが高まっており、WHOは、世界3700万人の失明者の約5%は糖尿病性網膜症が原因によるものだと推測している。WHOはまた世界で600万人がトラコーマにより失明していると推定。トラコーマは繰り返し思うことによって失明する伝染病で、1億5千万人以上が治療を必要としている。

国際協会は予防可能な失明と闘い、また視力に対する脅威に焦点を当てた世界的な取り組みを援助するために、2011年にWHOとの共同契約に署名した。これには児童失明、糖尿病性網膜症やトラコーマに対する新たな活動などが含まれる。

国際協会は1990年に視力ファースト・プログラムを開始して以来、WHOのようなパートナーと協力し、失明の主原因への取り組みに専念することで、世界的に失明者数を減らす上で重要な役割を果たしてきた。

LCIFは2001年から、WHOと共に回避可能な児童の失明撲滅プロジェクトを実施。具体的には、WHOと協力して、世界中の「児童にやさしい眼科センター」を通して1億2100万人の子どもたちに眼科治療を提供。更にこの契約の一環として300万ドルを提供し、発展途上国に「児童にやさしい眼科センター」を26件建設する。

LCIFはまたWHOと連携して糖尿病性眼病を予防し、抑制するための活動も実施している。発展途上国の医療従事者が、これまで以上に糖尿病性眼病を発見し治療するためのトレーニングを支援すべく、新たに40万ドルを提供する。

中国でのトラコーマ撲滅活動もWHOとのパートナーシップ契約の一つである。LCIFは中国でのトラコーマ問題の調査、評価活動を支援するために、2件の視力ファースト交付金、合計金額335万ドルを提供。調査結果は、2016年までに中国でトラコーマを撲滅する計画を立てるために役立てられる。

WHOのようなパートナーと活動することで、ライオンズは視力を保護することにおいて何が成し遂げられるかを示している。（アリー・ストライカー）

CLUB REPORT
クラブ・リポート

333-C地区

千葉県・市原さくらライオンズクラブ

高滝湖マラソンで甘酒の無料配布

1月12日、市原さくらライオンズクラブ（竹下怜子会長／32人）のメンバーは、第39回市原高滝湖マラソンの会場である市原市立高滝小学校のグラウンドで甘酒を配っていた。グラウンドには他にも多くの出店があり、スポーツウェアから食べ物までさまざまなものが販売されていた。だが、市原さくらライオンズクラブの甘酒は無料。走り終わったランナーや応援に来た人たちが、次々にもらいにくる。それに対して笑顔で応え、甘酒を渡していくメンバーたち。誰もが楽しそうだ。後ろで湯を沸かし、甘酒作りをサポートするのは親クラブである市原南ライオンズクラブ（竹内弘明会長／38人）のメンバーだ。

市原さくらライオンズクラブがこのアクティビティを始めたのは2007年のこと。今年で7回目となる。この高滝湖マラソンでは毎年、親睦団体である明健会がしいたけスープを無料配布している。しかし、市原市体育協会では他にもボランティアをしてくれるところを探していた。そこで体育協会と親交があった市原南ライオンズクラブの竹下徳永元地区ガバナーに相談があったのが始まりだ。

当時は市原南ライオネスクラブとしての活動で、配布するものは1月という季節柄、甘酒を選んだ。その後、市原さくらライオンズクラブとして独立してからも市原南ライオンズクラブの協力を得て

●投稿要領：
アクティビティ、例会など、クラブの活動を具体的に。700字程度。写真を添付。
ライオン誌ウェブマガジンのオンライン投稿か、Eメールまたは郵送で。
送付先は57ページ下。

継続している。
　最初の年はやっていることが上手く伝わらず、人が全然来なかったと言う。「無料で良いんですか?」と聞かれることもしばしばだった。しかし、2年目からは実施していることが浸透、毎年準備の段階から待っている人がいるほどの人気となった。この高滝湖マラソンには車で来る人も多いため、ノンアルコールの甘酒に変更して実施するなど工夫を重ねてきたことも功を奏している。ブースの周りには「ライオンズ　只今奉仕活動中」というのぼりを立てるなど、PRもばっちり。
　また、甘酒を配っている時に顔見知りの人がやってきて声を掛けてくれることも多いと言う。このことからも市原さくらライオンズクラブがいかに地域に根ざした活動を数多く行っているかがよく分かる。「地元のおばちゃんたちが何かやってる、って感じなのよ」と語ってくれるメンバーたちは忙しくも、楽しそうだ。
　ブースには途切れることなく人がやって来る。2100杯分用意した甘酒は大会が終わる前になくなった。

（取材／井原一樹　撮影／田中勝明）

336-D地区

島根県・江津ライオンズクラブ

献眼者合同顕彰慰霊祭を開催

江津ライオンズクラブ(46人)は2012年11月18日、献眼者合同顕彰慰霊祭を江津市総合市民センター敷地内献眼顕彰碑前で行った。これには献眼をされた方8人のお名前が刻まれている。

ご来賓、ご遺族、クラブ・メンバー40人の出席者があり、私が当クラブを代表して献眼者の勇気と善意、そしてご家族のご理解に感謝し、献眼をクラブ活動の大きな柱とすることを誓った。ご来賓の方々から慰霊の言葉が述べられた後、出席者は8人をしのびながら次々と献花をした。また、角膜移植を受けた方の感謝の手紙が朗読され、改めて私たちの活動の重さが身に染みた。義理の母親が献眼をされた、当クラブのメンバーでもあるライオン堀江成が遺族を代表して「多くの皆さんの出席の下で顕彰慰霊祭を開催して頂き、献眼者も大変喜んでいると思います」とあいさつをした。

この日は江津市の一大イベント「ごうつ秋祭り」が開催され、顕彰碑に立ち寄って碑文に見入る方も多かった。この会場に献眼登録、献血コーナーを設置し、献眼登録では13人、献血では42人にご協力頂いた。

この顕彰碑は当クラブが結成50周年のメーン事業として建立したものだ。島根県でのアイバンク角膜提供者は累計60人。うち江津市の提供者は8人。献眼登録者は425人(2012年11月18日現在)となっている。本人が亡くなられた際に角膜を頂くというこの事業の推進は容易なことではないが、一人でも多くの人が光を得られるよう、地道な努力を続けていく。

(会長/井上益雄)

335-D地区

兵庫県・加西ライオンズクラブ

加西DE婚活！

2012年12月2日、加西ライオンズクラブ(小林敏信会長/26人)は若い男女の出会いの会を開催した。この会は「加西DE婚活!!」と名付けられ、秋にリニューアルしたばかりである、兵庫県立フラワーセンター内のレストハウス「フルーリ」で実施された。

最近は結婚年齢が高くなっており、人口の減少や、過疎化が進む原因となっている。そこで若い男女の出会いの場を作ろうと考え、会長の重点事業として計画した。

加西市に在住、もしくは勤務している男性29人と他の地域からの女性31人、合わせて60人の参加があった。

レストランでおいしい料理を食べながら和気あいあいと時間を共有する。お腹が満杯となったところで奇麗な花の咲くフラワーセンターをグループごとに散策し、クリスマスムードの温室をスタンプラリーで巡る。これらを通じて、参加者たちは心を解かし合っていた。

再度レストランに戻り、席を順番に回ってお互いに話し合う。こうして参加者同士、フィーリングを確かめていた。そして皆さんの気持ちが盛り上がったところで、意中の人に投票をする。

カップリングの結果が出るまではエレクトーンのミニコンサートを楽しんだ。

投票の結果、赤い糸で結ばれたカップルが6組誕生し、加西ライオンズクラブからはささやかながらの記念品で祝福をした。

これからしっかりと愛を育まれ、幸せな結婚へと進まれることを願っている。

(第1副会長/北村守)

334-A地区

愛知県・津島ライオンズクラブ

「特別じゃない 私はふつう」佐野有美さん大いに語り歌う！

2012年12月9日、津島ライオンズクラブ（69人）は青少年健全育成事業の一環で「佐野有美さん講演とミニライブ」を主催した。1100人のお客さんが詰めかけ、津島市文化会館大ホール前には長蛇の列が出来た。

愛知県出身の佐野有美さんは先天性四肢欠損症で、あるのは短い左足と3本の指のみ。しかし彼女は豊川高校でチアリーディング部に所属し「車椅子のチアリーダー」として注目されたのを始め、あらゆる分野で活躍した。そんな彼女を取り上げたテレビ番組を見ていた石井利一会長と私は、逆境に負けず果敢に生きる有美さんと、献身的なご両親の姿、そして多くの友達の友情にいたく感動した。そしてこの感動を多くの人々と分かち合いたいと講演をお願いした。

オープニングは友情出演の清林館高校チアリーディングチームが華麗な演技を披露。その後、特別な電動椅子で登場した明るく可愛らしい笑顔の有美さんには、会場から割れんばかりの拍手が送られた。生と死と闘った22年間を、有美さんは明るい笑顔で語られ、会場からは笑いと、時折すすり泣く声が聞こえた。

次は日本レコード大賞企画賞に輝いた有美さんのミニライブ。その澄みきった歌声が会場に響き渡った。清林館高校チアリーダーが有美さんを囲んでのエンディングに観客は総立ちだった。

「ありがとう、良かったよ」「勇気をもらいました」と、会場を後にする人々の声に、今期最大のアクティビティを成し遂げた充実感か、見送りに立つ石井会長の目は心なしか潤んでいた。

（幹事／長尾昌和）

333-B地区

栃木県・宇都宮ライオンズクラブ

我がクラブの奉仕活動

宇都宮ライオンズクラブ（菅谷文利会長／27人）は今年度、52年目の活動に入った。そこで昨年末の活動を歴史を交えて原稿にすることとした。

2012年10月6日には栃木県立衛生福祉大学において「献血支援」を実施した。当クラブの献血支援活動は1981年に行った市内ライオンズクラブ合同献血会に始まる。その後、献血事業をスタートさせ、30年が経過した。86年には市内のオリオン通りに常設の献血ルームが開設され、当クラブはその前で献血推進事業を行った。これはこの献血ルームが2004年、宇都宮大通りに「うつのみや大通り献血ルーム」として移設されてからも、継続している。また、02年からは栃木県農業大学校、栃木県立衛生福祉大学校においても献血推進事業を開始した。このように、献血奉仕事業はクラブ内で継続アクティビティとして定着している。

10月7日には宇都宮市二荒山神社前で「赤い羽根街頭募金」を実施した。12月9日に実施した歳末助け合い街頭募金と共に、48年間継続している。県内のライオンズクラブでは当クラブが唯一実施しているもので、栃木県知事から表彰状も頂いた。

10月27日には「第10回うつのみやふれあいスポーツ大会」を後援した。この大会は障害者の方を中心としたスポーツ大会で、今年は956人が参加した。当クラブでは参加者全員にお弁当とお茶を配布している。前身の知的障害者スポーツ大会から数えて今回で22回目の継続奉仕である。

（PR情報委員長／坂本竹男）

330-A地区

東京国立ライオンズクラブ

市内奉仕団体合同の塞の神どんど焼き準備

1月14日、国立市谷保にある谷保第三公園ではまだ日が昇る前から多くの人が動き回っていた。この日行われる塞(さい)の神どんど焼きの準備をしている人たちだ。このどんど焼きは東京国立ライオンズクラブ（延島勝会長／15人）を始め、東京国立ロータリークラブや立川青年会議所国立部会など国立市内の奉仕団体が協力して実行委員会を結成、実施する一大イベントだ。毎年奉仕団体が持ち回りで実行委員長を務め、役割分担をして開催している。どんど焼きは小正月に行われる火祭りで、松飾りやお札などを焼く行事だ。その火であぶった餅や団子を食べると病気をしないとも言われている。国立のどんど焼きは例年約2千人が訪れ、市内の地区同士の交流行事としても大きな意義がある。

多くの人が参加する行事ということもあり、準備は前日から始まる。切り出した竹を組み上げるなど体力も使う作業が日白押しだ。当日は朝、日が昇る前に集合し、どんど焼きを訪れた方に焼いて食べてもらうためのまゆ玉作りなどを行う。寒い中、粉をこね、丸めていくが、これも思いの外重労働だ。また、東京国立ライオンズクラブはこういった準備と並行して、朝6時頃からコーヒーとココアをいれる。これは準備をしているロータリークラブや青年会議所などのメンバーに配るためのものだ。作業の合間にテントの前へやってくる人へと会員が渡していく。

東京国立ライオンズクラブがこの塞の神どんど焼きに参加するのは7年ほど前からだ。実行委員として参加していたメンバーが

いたのがきっかけだった。

当初は会員個人による協力が主だったが、3年前からクラブとしてコーヒーの提供を始め、実行委員長の輪番制にも参加するようになった。労力奉仕にも積極的に参加している。朝も早い活動だが、8割～9割の会員が集まるという。メンバーの意識は高い。

それだけの準備をして臨んだこの日だが、残念ながら朝から雨。公園での実施のため地面がぬかるみ、作ったまゆ玉を運ぶのも一苦労だ。更に夜明けからは気温がぐっと冷え込み、9時を過ぎた頃、空から白いものが舞い始める。東京でこの冬初めての雪だった。例年にない大雪で、交通機関にも多数影響が出た。この雪で人出が見込めないこともあり、まゆ玉作りは中断、点火式を1時間繰り上げて実施した。火を点けてもなかなか燃え上がらないため、灯油を片手に奮闘する実行委員会のメンバー。国立市消防団の助けも借りて効率的に火を燃やす工夫をしていた。

結局、雪の影響でまゆ玉を焼くことは出来ず、来てくれた方に配布した。朝から身を粉にして働いていた東京国立ライオンズクラのメンバーは大雪を残念がりながらも、無事にどんど焼きが終わったことを喜び、互いの労をねぎらっていた。

（取材／井原一樹　撮影／関根則夫）

大阪プラム ライオンズクラブ

人形浄瑠璃鑑賞で文楽入門

大阪プラム ライオンズクラブ（14人）は、2012年11月26日、結成10周年記念アクティビティとして、地元の小学生約90人を招待し、文楽入門として人形浄瑠璃鑑賞会を行った。国立文楽劇場の協力を得て、大阪市立福島区民センターにおいての開催である。幸い、地域住民の方々、並びにブラザークラブからも大勢のメンバーの参加を頂き、盛会に終わった。

当日、オープニングは浄瑠璃における太夫、三味線、人形遣いについての解説を聞き、浄瑠璃の一節を全員で熱唱した。

次に子どもたちの代表が3人ずつ舞台に上がり、三味線の体験や、人形の仕掛けや操り方を教わるなどした。こうして、子どもたちは徐々に文楽の持つ雰囲気になじんでいった。

その後、実演として「伊達娘恋緋鹿子」の「火の見櫓の段」を鑑賞。三味線の音色、人形の細やかな感情の表現などに子どもたちは感動し、舞台の魅力を感じた様子だった。

大阪で生まれ、古くから大阪の庶民に育まれてきた伝統芸能の人形浄瑠璃。この鑑賞会を機に、子どもたちは浄瑠璃を身近に感じて、深い興味を持ってくれたものと強く感じた。

過去、結成5周年の時には「能楽の魅力を探ろう」との趣旨で体験と鑑賞会を催した。これからも私たちのクラブでは青少年の健全育成の一環として大阪の伝統芸能を次世代に伝えるアクティビティをやっていきたい。これらを通して、子どもたちには伝統芸能を引き継いでいってほしいと願っている。

（会長／喜多喜美）

337-B地区

大分県・中津ライオンズクラブ

ワンパク！　たんけん中津

中津ライオンズクラブ（46人）は2012年10月13、14日に1泊2日で青少年健全育成事業「ワンパク！　たんけん中津」を中津市教育委員会との共催で実施した。この事業は中津市内の小学生を対象に、20年以上継続している。元は中津ライオネスクラブが実施していたものだが、4年半前に当クラブが引き継いだ。

発足当時、「最近の子どもたちは地域の良さ、そして歴史、文化や先人の方々のすばらしさを知らない」と言われており、子どもたちにもっと地域のことを知ってもらい、郷土愛を育み、胸を張って生きてほしいという趣旨で始めたものだ。当時のことを知るライオネスに聞くと、最初はバスを借りて中津城周辺の歴史的建造物や記念館巡りをしていたそうだ。バス代や弁当代、ガイドの方への謝礼などはライオネスのメンバーが支援する形だった。行事の終わりには「子どもたちは皆、自分の町を誇らしく思い、目が輝いていた」と話してくれた。その後、日程を1泊2日に拡大、当クラブが引き継いで今に至る。

今年は市内の小学校から45人が参加、教育委員会の先生や職員の方々の引率で実施された。山国町から耶馬渓町、本耶馬渓町を周り、閉会式は本耶馬渓支所で行われた。子どもたちが地域のすばらしさを知るだけでなく、大変仲良くなっていたことが印象的だった。

今日、友人を作る力や協力する力がない若者が多くなっている。今後も子どもたちのたくましく生きる力や郷土愛を育てるべく、この事業を続けていきたい。

（会長／後藤孔彰）

334-B地区

岐阜長良川ライオンズクラブ

岐阜市聴覚障害者協会から バス旅行協力金のお礼

岐阜長良川ライオンズクラブ（奥村保雅会長／42人）は2012年11月7日、クラブ例会に岐阜市聴覚障害者協会の志水道嘉会長と手話通訳の方を招待し、バス旅行協力金10万円を贈呈した。当クラブの聴覚障害者への支援は1981年に始めたボウリング大会以来、31年を数える。ボウリング大会は25年間実施しており、その間に他の障害者大会へグッズを提供するなどしてきた。また、団体バス旅行への支援も2年前から実施している。

これに対し、お礼文が届いた。「岐阜長良川ライオンズさんには30年もの間、協会の大きな支えとなって頂き会員一同心より感謝の言葉しかありません。景気の良くない現状にも途切れることのない支援に、貴クラブの器の大きさを一同本気で感じており、ありがたく思っています。聴覚障害者はコミュニケーションがとりにくいことから地域で孤立しがちで、ろう高齢者ともなると同じ障害を持つ仲間が集まる機会がなかなか持てません。このバスツアーは岐阜市手話サークル協議会にも呼び掛け、聴覚障害者29人、健聴者13人で11月11日に伊勢神宮と鳥羽の日帰りバスツアーへ出掛けます。閉じこもりがちな、ろう高齢者が楽しみにしています。それもこれも岐阜長良川ライオンズクラブの皆様の温かいご支援のおかげです。本当にありがとうございます。貴クラブのご迷惑にならない範囲で、今後も継続して付き合っていけたらうれしいです」

こんなに楽しみにして頂いていることもあり、今後も支援を続けていきたいと考えている。

（PR委員長／浅野有誠）

336-D地区

山口西京ライオンズクラブ

継続アクティビティ 清光園歳末餅つき

山口西京ライオンズクラブ（32人）では、毎年、児童福祉施設清光園で歳末餅つき大会を実施している。清光園とは、児童福祉法に基づく児童福祉施設であり、親の病気や経済的理由、虐待など、何らかの理由で家庭生活を続けることが困難で養護を必要とする18歳までの子どもたちが利用する施設だ。施設では、家庭に代わり、自立心を育て、将来社会人として生活出来るよう援助している。

現在、清光園では数十人の児童が共同生活を送っている。「もう一つの家」とも言えるような家庭的雰囲気の中で子どもたちは元気に生活している。

当クラブは、いつかこの施設を巣立っていく子どもたちが将来良き社会人として自立していくために、施設内だけでなく、地域社会との関わりが大切と感じ、施設で餅つき大会を行っている。餅つき大会を通していろいろな人々と出会い、会話をし、今まで見たことのない世界、それまでの自分にはなかった考え方や価値観などを子どもたち一人ひとりが少しでも感じてくればと思ったからだ。

今年も12月23日に7升の餅をついた。当クラブ・メンバーと、地元のサッカーチームで、中国リーグに参戦しているレノファ山口FCの監督他3人を含む総勢21人がお手伝いをした。足踏み役と手水役の威勢のいい掛け声と、子どもたちのはしゃぐ声が響き、お祭りさながらのにぎやかな大会となった。

来年以降も当クラブの伝統アクティビティとして継続していきたいと考えている。

（会長／小林訓二）

宮城県石巻市の沿岸部にある渡波は、江戸時代から製塩で栄え、昭和30年頃まで塩田があった地区だ。この地の守り神として敬われる伊去波夜和氣命神社（通称・明神社）では、夏には子どもたちが水難除け祈願にキュウリを供え、わんぱく相撲大会が開かれる。3・11の大地震の後、神社に押し寄せた津波は鳥居を倒し、拝殿の床ぎりぎりに迫った。近隣から身を寄せた250人余りは無事だったが、多くの家屋が流され、地区の住民約500人が津波にのまれた。

335-C地区

京都東ライオンズクラブ

被災地域の復興を支える心のよりどころを

その明神社に、京都東ライオンズクラブ（野口政男会長／48人）が犠牲になった人々の御霊を祭る祖霊社を奉納し、1月16日に鎮座祭が行われた。結成50周年を迎えたクラブは、復興の途上で厳しい状況にある被災地の力になりたいと記念事業を計画。クラブ名に同じ「東」の付く石巻東ライオンズクラブと石巻中央ライオンズクラブの協力を得て、現地視察を重ねた。その中で、明神社の宮司、ライオン大國龍笙（石巻東ライオンズクラブ）から、祖霊社を建立したいという願いを聞いた。「震災後バラバラになった地区の心のよりどころとして、故郷を離れていった人たちも集える場所にしたい」。ライオン大國の言葉に、クラブは支援を決めた。

16日は京都東ライオンズクラブの会員13人が石巻を訪れ、石巻東、石巻中央両クラブの会員と氏子も参列して寄贈式を開催。鎮座祭は日没後、凍てつく寒さの中で行われ、津波で家族を失った氏子2人が唐櫃を担ぎ、御霊が移された。翌17日、奉納された祖霊社での御霊祭では、参列者全員が手渡しで供物を運んで供え、御霊に祈りを捧げた。

京都東ライオンズクラブは祖霊社奉納の他、仮設住宅で暮らす被災者のために米3トンを寄贈。更に1月28日に京都で開催したチャリティー講演会で集めた募金70万円を、石巻市のボランティア・センターに寄託した。

「御霊移しの神事では、暗闇の中から聞こえる神職のきぬ擦れの音が、御霊が集まってくる音のように聞こえました。この祖霊社が地域の人たちの心の支えになってくれたらうれしい」と野口会長。被災者の心に寄り添う支援が、復興に向かう歩みを力強く後押しする。

（取材／河村智子）

335-B地区

大阪府・堺泉北ライオンズクラブ

落書き消し隊

2012年11月11日、堺泉北ライオンズクラブ（岡部信雄会長／26人）は南海高野線深井駅周辺の高架道路橋脚壁面にペイントされた3カ所の落書きを消すアクティビティを実施した。この事業は毎年場所を変えて行っているもので、今回で7回目となる。当日は小雨が降ったりやんだりの天候であったが、メンバーの孫やライオンズの活動に興味を持つ友人などを含む17人で行うことが出来た。

作業は、塗装業を経営するメンバーの指示の下、壁面色に近似調合された塗料を落書きの上からローラーで塗っていく。しかしそのままでは、塗料が道路面に流れ出し、歩道を汚してしまう。そのため、作業前に道路面にビニールシートを貼り、高所での作業をするための足場を準備、作業中の安全と作業後の塗装面を保護するための簡易防護策を設置した。塗装の専門家であるメンバーが在籍しているからこそ可能なアクティビティだ。完成直後の奇麗な塗装面と旧壁面との色合いが、時が経つにつれてなじむようにしてあることも感心させられた。

初めて参加した友人にはライオンズクラブがこのような立派な活動をしているのを初めて知った、と評価してもらえたが、世間一般にライオンズの活動が知られているとは言い難く、積極的なPR活動の必要性を感じることとなった。

日曜日の作業であったが、作業終了後すぐに本業に戻るメンバーもいた。このように、アクティビティを優先しようというメンバーの使命感はさすがであった。（第2副会長／中植邦和）

336-D地区

島根県・瑞穂ライオンズクラブ

小さいクラブでライオンズクエスト開催

瑞穂ライオンズクラブ（岡田義昭会長／31人）では2012年12月26日、27日の2日間にわたり、ライオンズクエスト「思春期のライフスキル教育」プログラムのワークショップを開催した。

2012年6月に浜田亀山ライオンズクラブから喜多村博明青少年健全育成委員長とライオン竹山勝彦が瑞穂町に来られ、瑞穂中学校の駅田校長を紹介、ライオンズクエストの瑞穂町での開催実施に向け動き始めた。11月には邑智郡3町の教育委員会へ出向き、各町教育長へ説明了承を取り付けると共に、2カ所の校長会で趣旨説明と参加依頼をした。

実施前日の12月25日午後には会場である出羽公民館へメンバーが集まり、ホワイトボードや机、椅子、プロジェクターなどの準備。夕方にはJIYDの講師である外川澄子先生が到着したので、迎えに行った。外川先生は自身が校長を務める小学校の修了式を終えたその足で羽田空港から飛び立つなど多忙の中で講師を引き受けてくださった。

当日は336・D地区第1副地区ガバナーライオン坂根勝に開催のごあいさつを頂き、研修がスタート。校長3人、教頭2人が参加した。管理職の参加者が多い地域は意識が高く、ライオンズクエストを実施しやすい風土があるとJIYDから評価された。参加者は2日間の研修に積極的に参加、2日目は各単元の授業を実際にやりながらの研修だった。これにより、実際の授業風景を想像した参加者の皆さんは自信を持てたように感じた。最後に修了証を研修者同士で渡し合って研修は終了した。

（PR情報委員／村田正明）

335-C地区

京都洛北ライオンズクラブ

ハイカーの道しるべに「案内板」寄贈

京都洛北ライオンズクラブ（杉原正芳会長／30人）は、地元の自治連合会や消防分団からの要望に応えて、岩倉ハイキングコースに「遭難救助及びハイキング案内板」の設置事業を行った。

京都市左京区にある岩倉ハイキングコースは『関西日帰り山歩きベスト100山』にも掲載されており、地元小学校が授業の一環としてハイキングを実施するなど、多くの方が利用する人気の高いコースである。

2012年11月23日、午前9時から、消防分団や当クラブのメンバー総勢23人が二手に分かれ、12本の案内板を約3時間かけて設置した。

小雨が降る中、消防分団のスタッフは案内板と、地面に穴を開けるための金属製の筒や、筒を地面に打ち込むためのハンマー、セメント粉を手分けして運搬。岩倉の山に詳しい自治連合会長を先頭に進んで行った。

瓢箪崩山の標高は532・4メートル、山頂までそう遠くないだろうと油断していたが、スタートからの急勾配に体から汗が、頭から湯気が吹き出し、寒さは一気に吹き飛んだ。悪天候にもかかわらず、道すがら3組のハイカーと出会い、コースの人気を実感した。以前の標識は木製で文字が読みにくく、古びた感じであったため、今回寄贈した案内板がハイカーの皆さんの良き道しるべになると思う。

当クラブは10年に大原ハイキングコースにも案内板を設置している。今回で2カ所目となる案内板の設置だが、どちらもクラブの歴史に残るアクティビティになると思う。

（広報委員長／須野原修二）

マデン国際会長からライオン誌8月号を通じて、識字率を高め、読書を推進するための「リーディング・アクション・プログラム」の発表があった。姶良ライオンズクラブ（米丸芳子会長／24人）もこれに応えようと討議を重ねたが、具体化されないまま時間が過ぎ去って行った。

そんな2012年12月20日に行った忘年例会。その中で実施したオークション会で資金を得ることが出来た。約40年にわたって続けている児童養護施設「若葉学園」での年末餅つき会が目の前に迫った時期でもあり、これを元手に図書を寄贈しようとの案が浮上した。早速打ち合わせに出掛け、こちらの意向を示すと学園側は快諾してくれたが、当クラブではどんな書籍を寄贈するのが良いのか分からない。しかしその時、会計のライオン大脇中が「妹が東京で教育系の出版社にいるので協力出来るよ！」と申し出てくれた。こうして出版社の協力を得て45冊の図書を寄贈することになった。

12月27日の餅つき会では図書の寄贈式、本の読み聞かせ会も

337-D地区

鹿児島県・姶良ライオンズクラブ

苦慮していたアクティビティの思わぬ素早い実施

実施した。子どもたちが読み書きの能力を向上させて世界観を広げて行くことを期待している。

いくら考えても具体案が作れなかった「リーディング・アクション・プログラム」がたった1週間で計画から実行まで出来たこと、また、東京～鹿児島間という距離を超えて実行出来たことが不思議だった。実行可能な活動方策が見つからず苦慮する場面も多いが、実現する意志を持っていれば必ずチャンスが巡ってきて実行出来るものだと思った。

（幹事／篠田照明）

「新しい公共支援事業」への取り組み

濱田　千惠子（福島シニア）

内閣府では交付金制度を設け、「新しい公共支援事業」を推進しています。新しい公共とは、従来は官でしか実施出来なかった領域を官民協働で担うことです。新しい公共では市民やＮＰＯが関わることで、住民の多様なニーズに対応した、きめ細かなサービスが提供されます。またサービスを提供する側にとっても出番や居場所があり、人の役に立つことの満足感を味わえる社会を目指しています。福島県が内閣府の交付金を基に設置した福島県地域づくり総合支援事業は、まさに新しい公共の概念を実現しようとするものです。

福島シニア ライオンズクラブは２０１０年に結成。私はチャーター・メンバーとしてささやかながら奉仕活動を行ってきました。震災以降は被災者への支援物資配給も行いました。が、ライオンズクラブの活動に対して物足りなさも感じていました。ライオンズは財力や暇がある人たちの集まりではない、物質的豊さを提供するだけのボランティアではないという考えです。

今、福島では、将来の見通しが付かないまま仮設住宅や借り上げ住宅に避難を余儀なくされている方たちの自立支援が喫緊の課題となっています。特に借り上げ住宅は行政の手が届きにくいのが現状です。

借り上げ住宅は分散しているため避難者の交流が少なく、今後孤独死の問題が懸念されます。また国民保険団体連合の医療費データによると、浪江町の高齢者は高血圧、糖尿病が県平均を上回り、一人当たりの医療費も高額でした。要介護認定者は震災前の10倍に増加しましたが、要支援と要介護１と軽度の方が多いので、早期対処が症状改善につながることも分かりました。一人暮らしの高齢者には話し相手を希望される方も多くいらっしゃいました。

私は東日本大震災関連事業対象の新しい公共支援事業交付金の特別枠を活用するアクティビティを、クラブに提案しました。これは浪江町からの避難者で、借り上げ住宅に暮らす方の心身の健康維持と自立支援を目的としたものです。公的資金活用に対する反対意見もありましたが、改革こそ前進であるとし、実施が決定しました。

同交付金は複数の団体が連携して活動することが要件の一つになっています。そこで当クラブが事業主体となり、浪江町、社会福祉法人、医療法人、老人保健施設、福島大学などとのマルチステークホルダー・プロセス（多様な組織が平等な立場で課題解決のために意思疎通を図るプロセス）による会議体を構成、それぞれが有する社会資源を提供・活用することとしました。借り上げ住宅の自治体での説明や個人情報保護順守等の徹底も図りました。こうして新しい公共の概念を取り入れた

イラスト／小川和政

「浪江町の借り上げ住宅避難者等の自立支援事業」はスタートしました。
　現在、福島市にある浪江町サポートセンター福島で避難者の健康維持のための自立支援、ヨガ、孤独解消のための傾聴ボランティアによる集団傾聴、交流等の事業が、40余人の登録参加を得て、毎月3回程開催されています。今年度予算では3月までですが、多くの避難者から寄せられている継続要望の声を、いかに反映させるかが今後の課題です。
　当クラブのようにまだ歴史が浅く基金が少ないクラブも、公的資金を利用することで、地域に貢献する大きな事業を手掛けることが出来ました。一方、制限も多く、事業に携わる複数団体による実行委員会を組織すること、計画、予算、実施報告書等の提出、ライオンズとは別の独立した会計処理などが必要とされました。事務的負担も少なくないため、出来れば専属の事務局を置きたいところです。
　今回の事業を通じて、ライオンズへの信頼の高さも実感することが出来ました。浪江町長に事業計画を持ち込んだ時も、避難者の参加を呼び掛けた時も、「ライオンズの企画なら安心だ」と、積極的に協力頂きました。
　行政だけでは手が回らない隙間を埋める新しい公共支援事業は、参加者の笑顔と信頼と感謝のシャワーを浴びつつ、クラブ・メンバーの生きがいにもつながっています。

感謝と友情の神戸マラソン

大東　千鶴代（兵庫県・神戸フェニックス）

　今年もまたあの日がやってきました。11月25日、神戸に2万人のランナーが集い繰り広げられる第2回神戸マラソン。今回の大会テーマは昨年に引き続き「感謝と友情」。阪神・淡路大震災から見事に立ち上がった街・神戸が、ランナーに夢と希望を送りました。
　当日は好天に恵まれ、会場には1万2千人が来場しました。神戸では六甲山から吹き降ろす六甲颪（ろっこうおろし）が名物ですが、この日は優しくランナーの背中を押すように風が吹き、須磨から塩屋・垂水にかけてはキラキラと輝く瀬戸内海の潮の香りがランナーを包み込みました。
　マラソンのスタート前には、東日本大震災の被災地から参加した岩手県立高田高校と、兵庫県立神戸高校、神戸市立葺合高校の生徒が合唱。出場ランナーは東日本大震災や阪神・淡路大震災の犠牲者に黙祷を捧げました。
　昨年に続いて335‐A地区（高野文男地区ガバナー）は、震災復興モニュメントの鉄人28号広場で、スペシャルオリンピックス支援を兼ねたイベントを催しました。12団体によるステージの他、ライオンズクラブとスペシャルオリンピックス日本兵庫などの団体と、地域の団体により31のブースが設けられ、ライオンズの各クラブは東日本大震災の復興を祈り売上金の一部を義援金として被災地に贈りました。
　今年も明石魚住ライオンズクラブは、被災地である岩手県大槌町・柏崎製麺所の磯ラーメンを提供しました。同クラブのサポーターとして他地区メンバーが多数協力してくださり、その姿は特に印象的でした。大槌の磯ラーメンには長蛇の列が出来ました。津波で家族5人を失った柏崎さんがこの場にいらっしゃり、その時におっしゃった「神戸の元気が励みになる」という言葉に

は涙を誘われました。
ふれあいフェスティバルの開会式では、高野ガバナーや大下勝長田区長、スペシャルオリンピックス日本兵庫の宮脇テル子会長の後に、大槌町から参加した被災者代表・八幡幸子さんがあいさつをされ、
「神戸の『1・17希望の灯り』から始まった運動が陸前高田、南相馬と伝わり、今月、大槌にも一筋の希望の灯りがともりました。この灯りに地元住民は勇気付けられ、全国のライオンズの皆さんに心から感謝しています」
というスピーチに会場から大きな拍手が巻き起こりました。後日、八幡さんは大槌ライオンズクラブに入会されました。
一方マラソンコースでは大会を支えるボランティアとして、クラブ・メンバー、事務局、レオなど104人が、給水ポイントでランナーに水を配りました。さっそうと駆け抜けるランナーたち。多くの市民ランナーが、給水ポイントで口々に感謝と激励の言葉を掛け合い、交流が生まれました。中でも東日本大震災の被災地特別枠として500人のランナーが参加、神戸の街並みを楽しみ、復興を誓いながらマラソンを走られたそうです。
これからも神戸から「感謝と友情」をお届けしたいと感じた神戸マラソンでした。

（335・A地区アクティビティ委員長）

みずからのよきところ

皆川 春安（千葉県・流山）

今年は巳年。何か「み」で始まる言葉はないものかと考えてみました。ちょうど、新年例会で司会を仰せつかったからです。考えてすぐに自分の名前が「み」で始まっていることに気付きました。

そこで辺りを見回しましたら、ありました。我がクラブの例会では冒頭で必ず「ライオンと呼ばるる人」を1人のメンバーが朗読をすることになっておりますが、その中に「みずからのよきところをまた友に送る。その人生こそ偉大なる感激そのもの。彼こそライオンと呼ばるる人」とあります。

この一節の頭文字をとってつなげてみましたら、

み　みんな仲良し
ず　ずっと前から
か　かたい絆の
ら　ライオンズ
の　のびやかな
よ　よき友を得て
き　気分は上々
と　とことん付き合い
こ　心うきうき
ろ　ローアをみんなで

と、うまくいきました。なんだかぴったりの気分であります。

今、我がクラブも会員増強に目を向けてがんばっておりますが、4人の若者が入会致しました。自分が入会した35年前もこんな気持ちではなかったかと思わず懐かしく振り返ることが出来ました。何と言っても若い時代の人たちに、我がライオンズクラブの魅力を見付けてもらうことが先決で、そう考えただけでも何か若返ってくるような気が致しますから不思議でございます。

さて、日頃忙しく立ち回っている自分ですが、巳年の年頭に「みずからのよきところ」を見いだして友に送るのも良いことだと思います。自分の良いところが分からないうちは友の美点もなかなか見いだすわけにはいかないかもしれません。一つ言えることは、ライオンズクラブに入会してからずっと年を取らないような気が致します。それはいつも、若いエネルギーがそばにあるからだと思います。それを身に付けていることが分かっていれば見事だと思います。そしてお互いに温かく見守りいつまでも絆を大切にしていこうと心に誓っております。未来は限りなく世界に羽ばたいていくことでしょう。今年こそ実りの年でありますように。

文中、いくつ「み」を見つけましたでしょうか。

幸せの国ブータンへ。目からうろこの旅

定広 武（北海道・札幌リバティ）

神秘の扉を開いた「幸せの国ブータン」へ、2012年6月7日から1週間の旅をしました。

ブータン王国はインドと中国に隣接するヒマラヤの中腹、海抜2千～4千㍍に位置し、九州の9割ほどの国土に約67万人が暮らしています。待ちわびた春に向かう季節で、水田と、点在する伝統様式の民家、ヒマラヤからの清涼な空気は旅人の期待を裏切りません。自然が目、身体、心に染み込んでいくようでした。

私は建物に関心があります。ガイドによると、真壁工法の建物は、チベットにルーツがあるそうです。降水量が少ないのでフラットな屋根が多く、ヒマラヤからの乾いた風や南からのモンスーン気候に適応した今の形式が完成されたとのこと。

伝統様式で建てられたブータン最古の寺院、キチュ・ラカン・パロゾンも見学しました。寺院には経典が収められている「マニ・ラコル」という筒が

あり、これを功徳があると言われています。私も大きな筒を何度も回して岩手、宮城、福島の復興を願いました。

首都ティンプーでは街中の道路は整備されていますが、街から出ると中央線も信号もない幅3～4㍍の狭い舗装路になり、民家の前には人と牛と馬だけが通る細い道が続いています。個人で車を所有しているのはまだ国民のごく一部に過ぎません。

ティンプーの外れには水田が広がり、国王の政庁タシチョ・ゾンが水稲の中にありました。国民に敬愛される国王はここで毎日の政務を執り行い、国民の幸せを考えているのです。

ブータン2日目にして既に、社会がゆっくり回っている感じを受けました。ここでは地域全体がファミリーのようになっていて、犯罪も少ないと言います。30～40年前の日本にタイムスリップしたようで、今の日本の生活に疲れ気味の私にはとても懐かしく、私たちの生活が大変な無駄をして、どれだけ自然を壊しているかということを考え直すきっかけになりました。

また人々の信仰のあつさにも感銘を受けました。山の上には長い竹さおに結び付けられたダルシンと呼ばれる白い経文旗がたくさんはためいています。ブータンの家庭では4～6人の子どもがいるのが一般的で、その中の1人は6歳になると僧侶として寺院に入ります。子どもたちはここで生活しながら、学問や仏教、国の歴史などを学ぶのだそうです。

3日目は標高2千㍍のティンプーから、標高3400㍍以上に位置するブータン随一の聖地、タクツアン寺院まで往復5～6時間のトレッキングです。高山病対策のために水分を十分に取り、大きく呼吸するように気を付けて歩き始めました。2時間ほどで標高2800㍍のレストハウスに到着。そこから更に1時間半、いったん下って渓流を渡ってから、舗装されていない400段の石段を登って、絶壁に貼り付くように建つ寺院にたどり着きました。標高が高いので息が切れ、聖地への巡礼は大変だと身に染みました。

夜はブータンの伝統的な風呂を予約しました。ミネラルを含み薬効があると言われる石をたき火で真っ赤に焼いて、木製の浴槽に沈めて湯にしたものです。水の便の良いところに据えられた露天風呂で、何よりも木の香りがすがすがしく、巡礼の疲れが消えていくようでした。ボーっとした頭で眺める夜空には星が一段と輝き、澄んだ空気の中での入浴は別世界の空間に居る感じがしました。

「幸せの国」と言われるブータンで感じたのは、生きていくための基本は家族であり、家族は子どもへの愛情、親の責任という絆で結ばれていることでした。生活の中に信仰が根付いていて、他人同士も助け合っていました。いくら富があっても一人では真の人間らしい生活は出来ません。互いに助け合ってこそ、自分の存在感や生きる喜びを感じることが出来るのではないかと考えました。

今回は目からうろこが落ちるような、すばらしい旅になりました。

Close up

オリジナルの忍者ヨガで古里・伊賀の活性化を

ヨガは健康法として注目されがちですが、本来は精神性が重要なんです。私のヨガも、日本人のスピリチュアルな部分を基本にしています。そのため、写経や座禅、瞑想、神事などと組み合わせた特別なヨガ合宿やセミナーを、聖地である薬師寺や高野山、伊勢神宮、それに沖縄県宮古島など、よくパワースポットと言われる所で、普通教室とは別に実施してきました。

ある時、それを知った伊賀市商工会議所の方から、伊賀でも観光と結び付けたヨガをやってもらえないかと話があったんです。商工会議所では、三重大学の教授を招き忍者学の講義を始めたり、旅行者を呼び込む着地型観光のためにいろいろ取り組んでいて、そこに力を貸してくれないかという依頼でした。ちょうど伊賀上野城築城400年祭の年だったので、それではと、お城と忍者をキーワードに企画を始めました。

伊賀流忍者が究めるべき五つの分野を定めた「忍者五道(気・香・薬・食・体)」という教えがあります。それを改めて一つひとつ見ているうち、ヨガと共通する部分が多く、理にかなった、すばらしいものだということに気付きました。そこでヨガを通じて忍者五道を、忍者五道を通じてヨガを伝え、現代に忍者の教えをよみがえらせようと、忍者ヨガを考案しました。思い付いたというより、たどり着いたという感じでした。そして、忍者衣裳を着て伊賀の町を歩き、上野城での忍者ヨガ体験や、忍者寿司、忍者パフェなど、皆さんと一緒にモデル・ツアーを立案し、町ぐるみで実行しました。

イタリアで開催されたヨガの国際大会で忍者ヨガを披露

その後、昨年7月にヨガの国際大会がイタリアで開催され、日本代表団として指導を行うことになりました。そこで忍者ヨガを披露すると、参加者からブラボー!と喝采を浴びました。皆さん、忍者のことをよくご存じで驚きました。その上、忍者ヨガにとても興味を持ち、更に教えてほしいと要請を受け、今年からイタリアのヨガ大学で指導することになりました。その話がテレビや新聞に取り上げられ、一時は取材の対応で大変でした。

この1年、忍者というキーワードで、いろいろなつながりと広がりがありました。また、忍者は「グローカル」な存在だということも実感しました。伊賀の皆さんにも、伊賀の歴史や忍者のことをもっと知って古里に誇りを持ってもらいたい、そしてこのすばらしい伊賀の宝物を世界に発信していかなくては、と強く思うようになりました。そのためには努力を惜しみません。「伊賀を元気に」が、私の使命だと考えています。

■堀川郁子
ほりかわ・いくこ　1957年三重県伊賀市生まれ。2011年、伊賀上野ライオンズクラブ入会。中京大学体育学部卒業後、水泳コーチとして活動。結婚後、家族で5年間アメリカ駐在を経験し、帰国後に英会話講師を経て、堀川ヨガスクール、足つぼ整体院やすらぎ開設。日本総合ヨガ普及協会理事、ヨガ指導歴27年、足つぼ療法師、整体師他。現在は代替医療としての生活ヨガと、日本人魂を磨くヨガ、地域力活用事業としての忍者ヨガの普及をテーマに活躍中。

写真・構成／鈴木秀晃

おすすめのippin

沖縄県那覇市

沖縄おでん

少し前まで、寒くなると「おでんの季節になりましたねえ」なんて言っていたのに、今や1年中おでんを売っているコンビニもある。日本人って、そんなにおでん好きだったのだろうか。しかも、南国・沖縄でも、おでんはしっかりと根付いている。

沖縄おでんには、テビチ(豚足)やウィンナー、夏ならウンチェー(空心菜)、冬なら小松菜、レタスなど季節ごとの青物が入る。もちろん大根、玉子、昆布など、定番のおでんだねもあるが、やはり郷に入っては何とやら、ここは迷わずテビチだろう。

那覇市で評判の「おでん悦ちゃん」では、ソーキ(豚のあばら骨)のみでだしを取り、味付けも塩だけ。それでもテビチとソーキのエキスが染み込み、こってりとした、まさに沖縄らしいおでんになっている。

ちなみに「悦ちゃん」は、営業中でもドアに鍵を掛けている。客は外からトントンとノックをして入れてもらうシステムなので、覚えておこう。

●「おでん悦ちゃん」沖縄県那覇市牧志3・8・1

ふるさと探訪

冬の男鹿を熱くする 神の使いと神の魚

秋田県 男鹿市

文／砂山幹博 写真／田中勝明

なまはげ行事の再現シーン。家の主人役となまはげによる問答には、あえてこの地方の方言が使われるため、本番さながらの臨場感が伝わってくる。男鹿真山伝承館にて

男鹿 OGA

「それは山からやって来る」

12月31日。その年を締めくくる最後のこの日は、男鹿っ子にとって最も訪れてほしくない日だろう。昨年も、その前の年にもさんざん泣かされた、あの恐ろしいなまはげがこの日、また家にやって来るのだ。

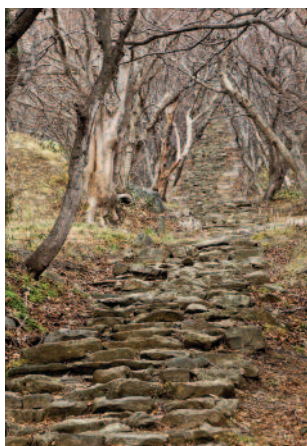
毎年大晦日の晩に男鹿半島のほぼ全域で行われる奇習なまはげといえば、イコール秋田県というイメージが根強いが、実は「男鹿のなまはげ」として商標登録もされている男鹿独自の重要無形民俗文化財である。大きな音で戸を開け、大声で叫びながら家に上がっては「怠け者はいねが～。泣ぐ子はいねが～」とターゲットである子どもや嫁を探しまわる。頭に角、手には包丁という出で立ちからよく鬼と間違われるが、その正体は悪霊を追い払い、新しい神様を家の中へ迎え入れに山から降りてくる神の使いである。恐ろしいうなり声にしても、子どもたちの健やかな成長を願う気持ちが込められているというが、とてもそうは思えないと男鹿では誰もが口をそろえる。

「なまはげの空気感というのがあって、その日の晩になるとザワザワとずっと先の方からなまはげがこちらに近付いて来る気配がするんです。

秋田県 男鹿市（おがし）

秋田県臨海部のほぼ中央、日本海に突き出た男鹿半島の大部分を占める都市。半島の付け根には大規模な干拓で有名な八郎潟の残存湖、西に真山、本山、毛無山の男鹿三山、中央部に寒風山がそびえ、東部の海岸には険しい断崖奇岩の絶景が続く。変化に富んだ美しい自然景観から、1973年に男鹿国定公園に指定されている。

総面積／240.80平方km

総人口／31,956人（2012年3月末現在）

男鹿市門前にある鬼が積んだと言われる999段の石段。石段の先には5匹の鬼を祭った赤神神社五社堂が鎮座する。男鹿ではこの鬼こそがなまはげであるという説を始め、異邦人漂流説や修験者説などがある

男鹿市北浦のなまはげ館に展示されている市内各地区で使われてきたなまはげ面。よく知られる「なまはげ」のイメージとはかけ離れた面ばかりで面白い

それが、いくつになっても恐ろしくてね」

　と地元の人が教えてくれた。男鹿の子どもは悪いことをすると「なまはげが来るぞ」と親や近所の大人に脅されて育ってきた。だから大人になってもその時の記憶が蘇るのか、なまはげに対し緊張感にも似た複雑な気持ちを持っているのだという。

恐怖、なまはげ体験

　男鹿半島の突端、真山のふもとで常時なまはげ行事を再現しているというので立ち寄った。この地方の典型的な曲家をそのまま活用した男鹿真山伝承館の玄関をくぐると、囲炉裏がある大部屋に通された。しばらくすると家の奥から主人役が登場し、なまはげの語源について説明してくれた。勉強や仕事もしないで囲炉裏にばかりあたっているとヒザに「なもみ」と呼ばれる赤い火あざが出来る。怠慢を戒めにこのなもみをはぎ取りに来る「なもみはぎ」が訛って「なまはげ」になったのだという。

　主人役が定位置に着くと、いよいよ再現劇の始まり。まず、案内人役の先立が訪ねて来て、主人になまはげを家に入れても良いか確認する。その年に不幸があった家、赤ちゃんが生まれた家の訪問は避ける決まりになっているのだ。先立の合図を確認すると、ライオンズ・ローアも真っ青というほどの大きく、そして低

なまはげ面職人の2代目石川千秋さん。男鹿半島の観光PRを目的に、先代と共に彫った観光用の面が現在の秋田のなまはげのイメージを作り上げた

くぐもったうなり声を上げながら、2匹のなまはげが勢い良く家に入って来る。なるほど、こうして目の当たりにすると、子どもが泣きわめく理由がよく分かる。
「怠け者はいねが〜」と子どもや嫁を荒々しく探しまわるなまはげを主人がなだめ、酒と肴で丁重にもてなし始めた。子どもや嫁は家のどこかに隠れているという設定らしい。主人のお酌を受けながら世間話に花を咲かせるなまはげだったが、子どもと嫁の姿が見えないことに気づくと「なぜいない」と、突然怒り出した。「怠け者は山へ連れて帰る」と、また家の中を探し出す。そこで主人は「来年までにしつけておくから」と、餅を渡して勘弁してもらう。なまはげは餅を手に、来年も訪れることを約束して山へ帰っていく。
　このやり取りはあくまで昔ながらの形式を色濃く残す真山地区のケースで、詳細は集落で異なる。異なると言えば、なまはげ面も集落によってまるで違うものを使う。木彫りが一番多いが、竹ザルや木の皮、金属で面を作っているものもある。いわゆる「なまはげ」としてよく知られる木彫り面は、昭和30年代に男鹿半島の観光PRを目的に作られたものと聞いて驚いた。今では実際に使っている集落もあるが、作られた当時は架空の面であったのだ。男鹿真山伝承館に隣接するなまはげ館では、

男鹿を代表的するハタハタ料理3品。手前からシンプルな塩焼き、米に米麹、野菜と共に乳酸発酵させて作る飯寿司（いずし）。脂の乗ったハタハタにしょっつるの独特な風味がよく合うしょっつる鍋

世界三大魚醤の一つ男鹿名物の「しょっつる」。原料はハタハタと食塩のみ。塩分で腐敗を抑制しながら3年以上の時間をかけて熟成する。大量に捕れたハタハタを大切にしてきた男鹿の文化を感じる逸品だ
▶株式会社諸井醸造（TEL.0185-24-3597）

現在市内30店舗で食べることが出来る男鹿しょっつる焼きそば。具材は各店お任せだが、肉は使わず海鮮を使い、しょっつるで味付けする点だけが共通している。▶喫茶アンナプルナ（TEL.0185-25-3188）

取材当日の朝に取れたばかりのハタハタは、お腹のブリコがはみ出していた

大晦日に各集落でしか見られないなまはげを一度に鑑賞出来る。

集落からなまはげが去ると、まもなく男鹿には新しい年がやってくる。

男鹿で男鹿ブリコ

日本海で寒流と暖流がぶつかるのがちょうど男鹿半島の沖あたり。だから男鹿の食卓には両海域の魚が上がる。暖流の影響が強くなる晩春から夏にかけてはマダイやブリ、冬は寒流系のタラが主役だが、1年を通して最も量が取れるのが県魚でもあるハタハタだ。もともと水深250メートル前後の海底に生息する魚で、底引き網漁で年中水揚げがある。これが11月下旬から12月中旬にかけてのわずかな期間に限り、産卵のために沿岸の藻場へと押し寄せてくるのだ。大群を定置網や刺し網で捕らえる「季節ハタハタ漁」は冬の秋田の風物詩にもなっている。その昔、食べ物が乏しかった沿岸の人々にとって、冬の訪れに轟く雷（神鳴り）と共に突然海岸に打ち寄せる取りきれないほどのハタハタの大群は、雷神様が遣わした魚と信じられた。「鰰（魚へんに神）」をハタハタと読ませるのにはそんな理由があるのだと聞いた。

男鹿ライオンズクラブは戦後すぐに建てられた雰囲気のいい木造建築の一角にクラブ事務所を構える。建物は、秋田の海運業をリードしてきた会社の持ち物

卵が産み付けられる藻場は、海岸からわずか30〜50メートルの場所に集中する。投網で取る人もいるほど目と鼻の先だ。この卵こそが秋田音頭にも歌われる男鹿ブリコ。プチプチの弾力と粘り気が楽しめるブリコが入ったメスは季節の味で、男鹿ではこれを食べないと冬が来た気がしないというほどのソウルフードだ。シンプルに煮付けや塩焼きにして頂くのが男鹿流。ただしブリコは鮮度が命で、保存や輸送が難しい食材である。本当にうまいものはここ以外ではそう滅多に食べられない。

「男鹿で男鹿ブリコ」

なるほど、この言葉の真意が分かったような気がした。

▼取材協力クラブ

男鹿ライオンズクラブ（藤田隆一会長／44人）＝1965年9月22日結成／スポンサー：秋田中央ライオンズクラブ／男鹿駅伝のコースでもある市内戸賀地区のハマナスロードに、これまで合計約2千本のハマナスを植樹。駅伝の開催に合わせ、6月の下旬に現地で地元の人と共に行う草刈り清掃を15年以上続けている。

男鹿市のシンボルである寒風山からの眺望。右手には日本海の海岸線が、中央から左にかけては、かつて琵琶湖に次いで日本で2番目の大きさだった八郎潟の埋め立てで残った八郎潟調整池（残存湖）が見える

読者から―1月号

■魅力あるアクティビティを

THEME「福岡フォーラム」の日本語セミナー「明日のライオンズを考える」の中で、パネリストが各自の考える現在の課題を5点ほど挙げていましたが、いずれも今まで幾度となく言われていることです。経験豊富なパネリストの方からもっと深い、突っ込んだ話を聞いてみたいものです。クラブ・リポートでは多くのアクティビティが取り上げられ、GMTで会員増強に関わる者として大変参考になります。今後も「魅力あるアクティビティ」=「会員増強」と位置付け活動していきたいと思います。「魅力あるアクティビティ」の事例をどんどん掲載してください。

北海道・余市ライオンズクラブ●坂本誠一

■ライオンとしての誇り

「山田實紘国際第2副会長候補インタビュー」で、日本のライオンズクラブが落ち込むことへの危惧、それが世界に及ぼす影響がどれくらい大きいかを考えさせられました。ライオンであることに誇りを抱ければ、おのずと仲間が増えるとの言葉に共感します。新設の「ライオン誌例会のススメ」は、早速例会で使わせてもらいました。会員は「そんなこと書いてあるの」と興味津々。平均年齢34歳のクラブには皆ビックリでした。

青森うとうライオンズクラブ●本堂均

■LCIFへの理解深める

LCIFに千ドル献金をされる会員の中には、財団の活動内容に関する情報に接する機会が少ない、と感じておられる方も多いのではないでしょうか。貴重な献金がどのように役立てられているのか、数字だけでなく、より具体的な現場の様子を伝える努力が求められていると思います。「LCIF FILE」は、そのような要望に応える大切な記事です。これからも奉仕の現場を報告することにより、LCIFに対する会員の理解に資することを期待します。

福岡舞鶴ライオンズクラブ●荒巻敬一郎

■誌面で会う全国の獅友

久しぶりの休日にライオン誌バックナンバーを読み返してみました。福岡フォーラムで知り合った人やクラブについて知りたかったためでしたが、とても興味深く読みました。取り上げているクラブや人の活動が面白いし、時には知り合いが寄稿していることもあり、興味を引かれます。インターネット上の交流や、一緒にアクティビティに汗を流す経験をきっかけに、ライオン誌が全国の友人の動向を知る楽しみな便りになります。私には、次に帰国した時に訪れる場所の候補地選びにも役立っています。

タイ・ナコンチェンライライオンズクラブ
●Miyuki Jaksuwan（山地みゆき）

●ライオン誌事務所来訪者芳名録

1 16 和歌山県南部 磯嵜秀喜
1 17 岩手県和賀 髙橋晴彦
1 17 宮城県蔵王 佐藤義則
1 17 福島県いわき中央 坂本勇
1 22 東京芝 三村俊隆
1 29 東京新都心 柴田誠
1 29 東京浅草 菱岡俊光
1 30 秋田県鷹巣 長坂正志

読者プレゼント

■写真集『南三陸から vol.2』を10人に

THEME「追跡・東日本大震災Ⅲ」の被災地クラブのリポートに登場した宮城県・南三陸志津川ライオンズクラブ・ライオン佐藤信一の写真集『南三陸から vol.2 2011.9.11～2012.3.11』（発行：ADK南三陸町復興支援プロジェクト　発売：㈱日本文芸社）を読者10人にプレゼントします。古里と大切な人々の姿を収めた写真集の第2弾。この写真集の第1弾で、ライオン佐藤は第43回講談社出版文化賞【写真賞】を受賞しました。

写真集は定価1,500円。1冊に付き300円が南三陸町に寄付されます

プレゼントをご希望の方は、はがきに「南三陸」と明記し、氏名、クラブ名、住所、電話番号をご記入の上、ライオン誌プレゼント係までご応募ください。本誌へのご意見、ご感想もお書き添えください。締切は3月末日。応募多数の場合は抽選となります。

【宛先】〒104-0045　東京都中央区築地2-2-1
築地細田ビル7階　ライオン誌事務所

＊オンライン応募は、ライオン誌ウェブマガジン（www.thelion-mag.jp）の「ライオン誌日本語版」→「プレゼント応募」から。

〈56ページクイズの解答〉 第1問=b.／第2問=a.／第3問=c.／第4問=b.／第5問=c.

もう一度読みたい「あの記事」

●1981年6月号　獅子吼

『ライオン』誌バックナンバーから、読者の皆さんにぜひもう一度読んで頂きたい記事をピックアップ。スペースの関係上、多少の編集を加えている場合があります。

『みどりこそ命』に学ぶ

横山森之助（新潟県・関川ライオンズクラブ）

地区年次大会でアクティビティ・スローガン『みどりこそ命』が決まり、どのクラブでも自然愛護や環境整備などの奉仕に真剣に取り組んでいた8年前のことでした。

関川ライオンズクラブでも熱心な会合が持たれました。その結果、村内にある磐梯朝日国立公園鷹の巣野営場の原生林の樹木調査をし、樹木名札を作って取り付けることになりました。

しかし計画案を詰めていくと、大きな壁に突き当たってしまいました。それは、面積約3ヘクタールの樹海へ調査の足を踏み入れ、樹木一本いっぽんを検体し、その樹幹へ調査ナンバーを打ち込み、赤テープを結びつけ、和名、科名、属名、種名、特徴、分布、用途などを記録する専門的学識のある会員がいないことでした。

会員30人が知恵を結集して決定したアクティビティも、荷が重過ぎたか、中止やむなきの空気が流れ出しました。その時、平常は至って無口なライオンが、一言ひとこと自問自答するような口調でこう言うのです。

「『みどりこそ命』というアクティビティは『奉仕こそクラブの命』という気持ちに全員がなりきらない限り、計画も実行も進まないのではないか」

この一言で心機一転、「よしやろう、やらねばならぬ」という強い決意と会員の連帯感がみなぎったのでした。

その後、講師として植物研究家のK先生と林業指導家S先生のお二人を村外から招き、2年間、現地で手取り足取りの指導を受けました。

樹木名札はこの地の代表的樹木である38科84種、300本のみに絞って取り付けることになりました。資材と塗料は全て会員の寄付、名札書きの作業も一切、会員の手で行い、昼食や休憩時の茶菓は会員家族のサービスでと、息もぴったり合ったものでした。その後、毎年早春に行う名札の整備や、雪で損壊した札の補充作業も、会員の手で行う年中行事となりました。

このアクティビティを通して、クラブは一つの大きな教訓を得ることが出来ました。

計画初期に立てた方針は、次のようなものでした。名札は検体した全ての樹木に付ける。特にこの地にしかない珍種や美しい花を咲かせる木や野草、果実酒の原料となる木の実と草の実などは、広報を兼ねて大いに標示する。ところが両先生に指導を受ける中で、他県で名札取り付け後に植物盗難事件が増加した事例などを聞き、樹木や野草に関するアクティビティならば、少なくとも自然の状態のままでの保存を第一としなければならないことが分かったのです。『みどりこそ命』というスローガンの真意を理解、把握せず、人間へのアピールのみを考え、奉仕という名で、実は破壊に通ずる作業をやろうとしていたのでした。こうして、アクティビティは、単に思い付くままにやりさえすれば良いものではないことを学んだのでした。

あれから8年の星霜は、あっという間のようでした。あの当時、名札を付けなかった草木は、1本も1株も枯れもせず、年々成長しています。

「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」にならないために、「転ばぬ先の杖」となる深い思慮によって、奉仕活動に努力したいものだと思うこの頃です。

ライオン誌例会のススメ
―次の例会ですぐ使える情報

何でも日本一

■上半期会員純増ナンバーワン

昨年7月から12月までの上半期に、最も会員数を増やしたクラブは三重県・松阪中央ライオンズクラブで、純増56人。入会者57人中55人が家族会員で、会員数を一気に135人に増やした。2番目は岐阜南ライオンズクラブの純増42人。岐阜県と三重県で構成する334-B地区では、地元の岐阜県・美濃加茂ライオンズクラブに所属する山田實紘国際第2副会長候補者を応援しようと、会員増強の気運が大きく盛り上がっている。昨年12月末の時点で、同地区の会員純増は596人と、大きな成果を上げている。

この日・この月

3月8日は「国際女性の日」。昨年のこの日、パン・ギムン国連事務総長が発したメッセージには、「女性と女児のエネルギー、才能、そして強さは、人類の最も貴重な未開発資源」とある。ライオンズクラブにおいても、その貴重な資源の開発が急務となっている。女性の会員数を増やすだけでなく、女性リーダーの活躍の場を広げることが大きな課題だ。会員に占める女性の割合は世界で24・5%、日本は11・9%（昨年12月末）。今年度の女性リーダーの割合は国際理事で14・7%、女性ガバナーは世界で20・3%。日本では333-C（千葉県）、335-D（兵庫県西）、337-A（福岡県）の3地区で女性ガバナーが活躍中だが、8・6%に留まっている。

今月号の記事から

THEME「追跡・東日本大震災Ⅲ」の座談会（14～19ページ）では、被災地での支援に積極的に取り組んだ3クラブの経験を踏まえて、今後の活動の展望を語ってもらいました。記事を参考に、いざという時にクラブがどう動くか、例会で話し合い、検証してみてはどうでしょう。

★ライオン誌例会のノウハウを収めた「ライオン誌例会 開催ガイド」は、ライオン誌ウェブマガジン（www.thelion-mag.jp）「各種書式／ロゴ」の「ライオン誌関係」のページでダウンロード出来ます。本誌バックナンバーはEブック形式で公開しておりますのでご活用ください。

クイズ de 例会

〈第1問〉東日本大震災で甚大な被害を受けた東北地方。ライオンズの複合地区名はどれ？

a. 331　b. 332　c. 333

〈第2問〉災害などの緊急事態に備え、効率的な支援を提供することを目的にした協会のプログラムの名称は？

a. アラート　b. エリート　c. スマート

〈第3問〉災害時に援助金を交付し、被災地のライオンズの活動を支援する財団の略称は？

a. LCI　b. LCF　c. LCIF

〈第4問〉災害時、第3問にある財団が地区ガバナーの要請に応えて交付する緊急援助金の額は？

a. 5千ドル　b. 1万ドル　c. 1万5千ドル

〈第5問〉東日本大震災に対する支援のため、第3問にある財団に世界のライオンズが寄せた献金の総額は？

a. 1,100万ドル　b. 1,600万ドル　c. 2,100万ドル

★回答は54ページ下

次号予告

THEME LCIF

愛知県・幸田ライオンズクラブと沖縄県・八重山ライオンズクラブによるカンボジアでのLCIF交付金事業をリポート。2011-12年度年次報告も掲載。

ふるさと探訪 広島県東広島市

市の中心、西条は名高い酒どころ。街には赤れんがの煙突と白壁の風情ある酒蔵が残る。名物・美酒鍋も紹介。

国際社会と日本の矜持

ライオン誌
日本語版委員
◉
茂尾　実
（北海道・黒松内）

日頃、「国際化」「国際協調」という言葉を安易に使ってはいないだろうか。世界的な奉仕団体に身を置く一人として、再考が必要と思う。

世界には1年中氷に閉ざされた国がある一方で、砂漠化が進む灼熱の国や雨季と乾季しかない国もある。1日1ドル以下の所得で日に3度の食事を満足に取れない人が15億人を超えたと聞く。十分な医療やケアを受けられずに命を終とす幼児は3秒に1人に上る。教育を受けたくても校舎すらない国もあり、非識字率の世界平均は26％である。社会インフラ整備が不十分で、情報や交通体系が不便なばかりか清潔な飲み水さえない国、情報を規制された独裁的な国、今も内紛や戦争の絶えない国。そんな国々が地球上にあまたある。

その国際社会の中で、日本のGNP、情報・医療・科学技術の水準は世界のトップレベルにある。社会構造のひずみで不遇にあえいでいる方がおられることは承知しているが、国民の大半は飽食し、体型維持のために食べない、という人の何と多いことだろう。

四季のはっきりした国土に暮らし、私たちは折々に季節の風を感じる。望めば高度な文化や教育を存分に享受出来、識字率は世界のトップレベル。70年に近い間、徴兵も内紛も戦争もない平和な国は、世界でもまれな存在だ。

国際社会の中で、日本の国あるいは日本人としての矜持をしっかりと認識すべきだろう。その上で、奉仕させて頂く国際協会の一員として、喜びと感動を共にする奉仕の仲間を募り、国際協会の組織を強固にしていくことが、私たちの使命ではないだろうか。

ライオンズクラブにおいては「数は力」と言っても誤解はないものと思う。ライオンズの仲間を増やすことは、地域への奉仕、そして世界への奉仕の担い手を増やすことを意味するからだ。

奉仕の軸足を生活地域に置きながらも、私たちは常に広い世界に目を向けていたいものである。

Official publication of Lions Clubs International

Published by authority of the Board of Directors in 20 languages – English, Spanish, Japanese, French, Swedish, Italian, German, Finnish, Flemish-French, Korean, Portuguese, Dutch, Danish, Chinese, Icelandic, Greek, Norwegian, Turkish, Thai and Hindi.

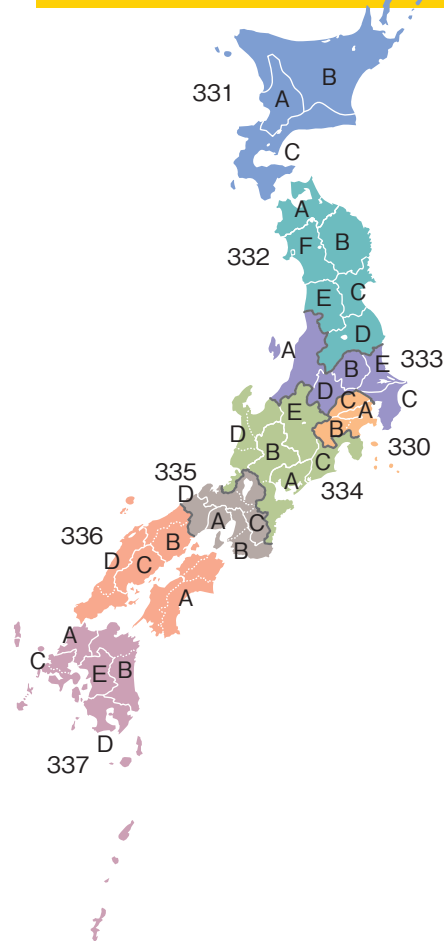
Lions Clubs International Headquarters
300 W 22ND STREET OAK BROOK IL 60523-8842 USA
TEL.(630)571-5466 FAX.(630)571-8890
Web site: www.lionsclubs.org

ライオン誌日本語版事務所
〒104-0045 東京都中央区築地2-2-1 築地細田ビル7階
TEL.(03)3542-9571(代)　FAX.(03)3546-2630
E-mail. edit@thelion.jp
Website:www.thelion-mag.jp

日本のライオンズ

2013.1.31　eMMR ServannA報告による

地区	都道府県	クラブ数	会員数	男性会員	女性会員	期首からの増減
330-A	東京	203	4,979	4,256	723	-15
330-B	神奈川·山梨·東京	174	4,830	4,220	610	-84
330-C	埼玉	94	2,286	2,048	238	-19
330	計	471	12,095	10,524	1,571	-118
331-A	北海道（道央）	72	2,430	2,260	170	17
331-B	北海道（道北·道東）	89	2,479	2,349	130	27
331-C	北海道（道南）	53	1,786	1,596	190	20
331	計	214	6,695	6,205	490	64
332-A	青森	65	1,824	1,591	233	86
332-B	岩手	55	2,237	1,599	638	-20
332-C	宮城	76	1,556	1,260	296	15
332-D	福島	76	1,971	1,777	194	27
332-E	山形	58	1,843	1,641	202	33
332-F	秋田	49	1,330	1,048	282	48
332	計	379	10,761	8,916	1,845	189
333-A	新潟	78	2,812	2,506	306	-11
333-B	栃木	53	1,475	1,086	389	3
333-C	千葉	139	3,475	2,904	571	36
333-D	群馬	53	2,048	1,669	379	-7
333-E	茨城	78	2,836	2,549	287	90
333	計	401	12,646	10,714	1,932	111
334-A	愛知	122	5,195	4,645	550	8
334-B	岐阜·三重	82	4,180	3,292	888	710
334-C	静岡	82	3,092	2,964	128	-15
334-D	富山·石川·福井	100	3,895	3,638	257	96
334-E	長野	52	2,014	1,788	226	31
334	計	438	18,376	16,327	2,049	830
335-A	兵庫（東）	93	2,244	1,932	312	-61
335-B	大阪·和歌山	181	5,522	4,838	684	81
335-C	滋賀·京都·奈良	120	3,929	3,608	321	53
335-D	兵庫（西）	66	1,921	1,710	211	3
335	計	460	13,616	12,088	1,528	76
336-A	徳島·高知·香川·愛媛	151	5,481	4,833	648	10
336-B	鳥取·岡山	96	3,079	2,783	296	32
336-C	広島	101	3,421	3,212	209	20
336-D	島根·山口	99	3,180	2,950	230	49
336	計	447	15,161	13,778	1,383	111
337-A	福岡·長崎	116	4,473	3,915	558	122
337-B	大分·宮崎	73	2,335	2,163	172	24
337-C	佐賀·長崎	84	3,072	2,577	495	-16
337-D	鹿児島·沖縄	80	2,365	2,157	208	19
337-E	熊本	58	1,581	1,423	158	-20
337	計	411	13,826	12,235	1,591	129
総計		3,221	103,176	90,787	12,389	1,392
世界のライオンズの		7.0%	7.7%	8.9%	3.7%	

日本ライオンズクラブ分布図

世界のライオンズ

2013.1.31　国際協会集計

ライオンズ国または領域	207
世界のクラブ数	46,100
世界の会員数	1,347,132
※男性会員数	1,016,521
※女性会員数	330,611
期首からの増減	-240

国	クラブ数	会員数	期首からの増減
アメリカ	12,092	340,638	-6,485
インド	6,094	220,513	4,341
韓国	2,099	81,627	272

第96回ライオンズクラブ国際大会 - 7月5日～9日

ドイツ・ハンブルク

7月5日(金)　★大会サービスセンター オープン
7月6日(土)　★インターナショナル・パレード
7月7日(日)　★開会式
7月8日(月)　★第2回総会／代議員資格証明最終期日
7月9日(火)　★投票日／閉会式

ライオン誌3月号
昭和33年12月19日付第三種郵便物認可　定価180円　送料実費76円
2013年(平成25年)2月20日発行　毎月1回20日発行　第55巻第9号
発行所　ライオンズクラブ国際協会ライオン誌日本語版事務所　〒104-0045 東京都中央区築地2-2-1 築地細田ビル7階 Tel 03-3542-9571
印刷所　共同印刷株式会社